

池ノ台遺跡

発掘調査報告

1979

八千代市遺跡調査会
八千代市

序

八千代市内の遺跡は、現在97ヶ所が確認され、内容は、散布地、古墳、貝塚、塚、城址などで、そのうち、中近世の塚が20ヶ所 149基も確認され、県内市町村のうち1番多く分布しています。これら多くの埋蔵文化財を抱え本市において、近年急激な開発の波が押し寄せ、その変貌は著しいものがあります。山林は切り開かれ、台地は削平され赤土を露出し、谷は埋められ、清水は涸れ、地形は日増しに様相を変え、忽然と住宅が立ち並ぶ現状です。これらの開発によって、人々の生活水準を高め、社会の要求を実現させていく為に欠くことの出来ないと同様に、こうした目先の要求を満すだけではなく、祖先から長い年月にわたって守り伝えられてきた掛けのない文化遺産を不注意な行為により失うことがないように、開発行為等の事前協議の会議に参加して、文化財の破壊を未然に防止するよう努力してまいりました。

今回、発掘調査した「池ノ台遺跡」については、八千代市都市計画街路がこの遺跡上を通る為、県教委、市教委、市都市計画課の三者による協議により、記録保存の処置を講ずることになりました。

調査は、八千代市遺跡調査会が受け、市文化財審議委員、村田一男氏の指導のもとに、平岡和夫氏が調査主任として現場で指揮を取られ、多くの成果を上げることが出来ました。

これらの成果をここに発掘調査報告書として上梓することが出来ました。本報告書が各方面で広く活用され、八千代の歴史を知る資料の一部となれば幸いです。

最後に、この調査にたずさわられた調査員各位に対し、厚く感謝申し上げるとともに、八千代市都市計画課をはじめ関係各位に対し、深甚なる謝意を表する次第です。

昭和54年12月

八千代市遺跡調査会

会長 村田和彦

(八千代市教育委員会教育次長)

例　　言

1. 本書は、千葉県八千代市、八千代市役所都市計画道路3、4、1号線建設工事に先駆け実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、八千代市役所の委託を受け、千葉県文化課の指導のもとに組織された八千代市遺跡調査会が実施した。
3. 遺跡の所在及び期間
所在地 千葉県八千代市
期間間 昭和54年8月11日から昭和54年10月26日
4. 本書に係る遺物等の整理、図版の作成、執筆及び編集にあたっては、発掘担当者である平岡和夫・大賀健が行い、根本時子・石井百々子・浅野葉子・石井洋子・丸静江・水落やエの協力を得た。
5. 本書の編集は、平岡・大賀が担当し、平岡が総括を行なった。
6. 本調査の遂行にあたっては、下記の機関、諸氏に御指導、御協力を賜った。記して感謝の意を表する。

千葉県教育委員会文化課・八千代市都市計画課・村田一男・鈴木道之助・西山太郎・折原繁

目 次

序	
例 言	
第一章 遺跡の概観	1
1. 遺跡の立地	1
第二章 調査に至る経過と組織	2
1. 調査に至る経過	2
2. 調査組織	2
第三章 調査の概要	3
1. 調査の方法	3
2. 土 層	3
3. 日 誌 抄	3
第四章 遺構と遺物	5
第五章 小 結	35

挿図・表目次

- 第1図 遺跡の位置図
第2図 遺構全体図
第3図 第1号住居址実測図
第4図 第1号住居址カマド実測図
第5図 第2号住居址実測図
第6図 第3号住居址実測図
第7図 第3号住居址カマド実測図
第8図 第4号住居址実測図
第9図 第4号住居址カマド実測図
第10図 第5号住居址炭化物分布図
第11図 第5号住居址実測図
第12図 第5号住居址カマド実測図
第13図 第6号住居址実測図
第14図 堀立柱遺構実測図
第15図 土塙実測図 (1号・2号・3号・4号・6号・7号)
第16図 土塙実測図 (5号・8号・9号・10号・11号・12号・13号・16号・17号)
第17図 土塙実測図 (14号・15号)
第18図 炉址状遺構
第19図 ピット群
第20図 第1号住居址出土遺物実測拓影図 (1)
第21図 第1号住居址出土遺物実測拓影図 (2)
第22図 第2号住居址出土遺物実測拓影図
第23図 第4号住居址出土遺物実測拓影図
第24図 第5号住居址出土遺物実測拓影図
第25図 炉址状遺構出土遺物実測拓影図
第26図 グリッド内出土遺物実測図 (石器)
第27図 グリッド内出土遺物実測拓影図

第1表 炉址・ピット計測値表

第2表 ピット群計測値表

写真図版目次

- 図版1 遺跡航空写真
- 図版2 遺構写真 1 第1号住居址確認状況
2 第1号住居址遺物出土状況
- 図版3 遺構写真 1 第1号住居址調査状況
2 第1号住居址カマド調査状況
- 図版4 遺構写真 1 第1号住居址カマド調査終了状況
2 第1号住居址調査終了状況
- 図版5 遺構写真 1 第2号遺構調査終了状況
2 第3号住居址調査状況
- 図版6 遺構写真 1 第2号遺構、第3号住居址調査終了状況
2 第4号住居址遺物出土状況
- 図版7 遺構写真 1 第4号住居址調査状況
2 第4号住居址カマド調査状況
3 第4号住居址カマド調査終了状況
- 図版8 遺構写真 1 第4号住居址調査状況
2 第4号住居址調査終了状況
- 図版9 遺構写真 1 第5号住居址炭化物出土状況
2 第5号住居址炭化物出土状況
- 図版10 遺構写真 1 第5号住居址調査状況
2 第5号住居址カマド調査状況
- 図版11 遺構写真 第5号住居址カマド調査状況
- 図版12 遺構写真 1 据立柱状遺構調査状況
2 溝状遺構確認状況
3 溝状遺構調査終了状況
- 図版13 遺構写真 炉穴状遺構調査状況
- 図版14 遺構写真 1 第1号土塙土層堆積状況
2 第1号土塙調査終了状況
- 図版15 遺構写真 1 第2号土塙調査状況
2 第2号土塙調査終了状況
- 図版16 遺構写真 1 第4号土塙調査状況
2 第4号土塙調査終了状況
3 第5号土塙調査終了状況
- 図版17 遺構写真 1 第9号土塙調査状況

2 第10号土塙調査状況

- 図版18 遺構写真 第11号土塙
- 図版19 遺構写真 第15号土塙（倒木址）
- 図版20 遺構写真 第16号土塙
- 図版21 遺構写真 遺跡内石器出土状況
- 図版22 遺物写真 第1号住居址出土遺物
- 図版23 遺物写真 第1号住居址出土遺物
- 図版24 遺物写真 第1号住居址出土遺物
- 図版25 遺物写真 第2号遺構出土遺物
第4号住居址出土遺物
- 図版26 遺物写真 第4号住居址出土遺物
第5号住居址出土遺物
- 図版27 遺物写真 第5号住居址出土遺物
- 図版28 遺物写真 第5号住居址出土遺物
- 図版29 遺物写真 炉穴状遺構出土遺物
第16号土塙出土砥石
- 図版30 遺物写真 遺跡内出土繩文式土器
- 図版31 遺物写真 遺跡内出土繩文式土器
遺跡内出土土師式土器
- 図版32 遺物写真 遺跡内出土石器（上表・下裏）

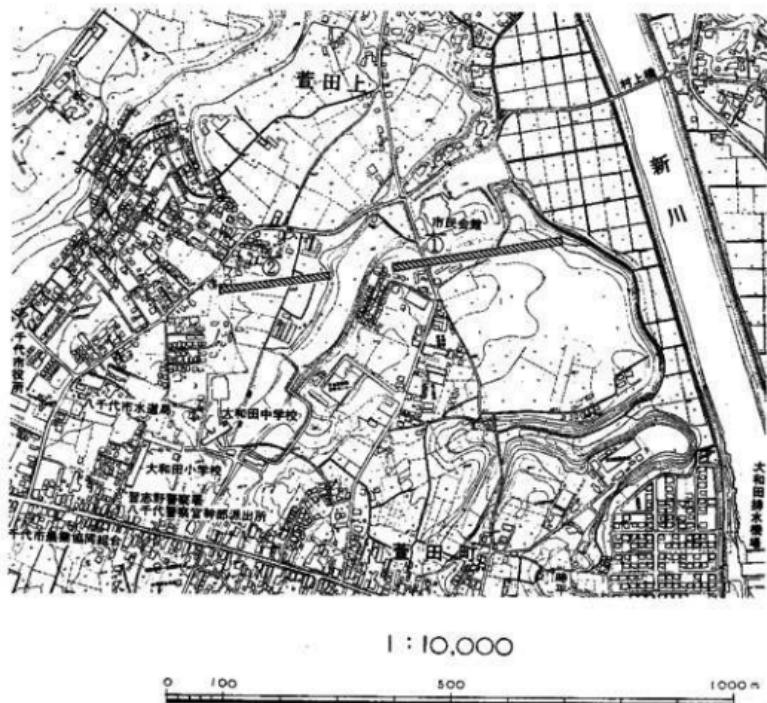
第一章 遺跡の概観

第一節 遺跡の立地 (第1図)

池ノ台遺跡は千葉県八千代市池ノ台に所在する縄文時代から歴史時代にかけて包蔵地である。遺跡付近の地形をみると八千代市平戸地先より侵入する印旛沼水系の1つ新川流域の通称、萱田台と呼ばれる台地の1角に立地する。この台地は小支谷が樹枝状に入りくみ、複雑な地形を形成しており、川崎山遺跡の東側と向いあうように位置する。

また台地上には、白幡前遺跡、萱田北海道遺跡が点在しております。これら遺跡は区画整理に伴う埋蔵文化財発掘調査が行なわれている。

以上が、本遺跡の立地の概要であるが、歴史的環境及び付近の遺跡については、「萱田町川崎山遺跡調査報告」を参照していただきたい。



1. 萱田町川崎山遺跡 2. 萱田町池ノ台遺跡

第二章 調査に至る経過と組織

第一節 調査に至る経過

八千代市都市計画街路3・4・1号線は、市内の上高野と新木戸を結ぶ路線で国道296号線のバイパスの役割を果す道路である。すでに建設工事は、市の東側の上高野から進められ、その路線上には幾つもの埋蔵文化財包蔵地の所在が確認され、昭和49年度に村上供養塚を、昭和50年度に村上古墳群の発掘調査を実施し、すでに調査報告書が刊行されている。

今回、発掘調査を実施した池ノ台遺跡は、道路の路線上、萱田町川崎山遺跡の東側台地上に位置し、すでに遺跡の所在が確認されていた。

遺跡の取り扱いについては、千葉県教育委員会、八千代市教育委員会、都市計画課との三者によって協議が重ねられたが、この路線はすでに完成した部分が多く、路線変更が不可能な為、記録保存は止むを得ずとの結論が出た。調査は、萱田町川崎山遺跡発掘調査終了後の昭和54年8月11日より開始された。

(木原)

第二節 調査の組織

本調査にあたり、八千代市教育委員会において、教育次長を中心として調査会が下記のとおりに組織された。

八千代市遺跡調査会

会長 村田和彦 教育委員会次長

調査指導 鈴木道之助 千葉県教育委員会文化課文化財主事

清水盛人 教育委員会社会教育課長

平岡和夫 山武考古学研究所

調査主任 平岡和夫

調査員 大賀 健 山武考古学研究所

岡田 宏 山武考古学研究所

補助調査員 岩沢茂好、山崎昭造、大江 納、川崎正一、石井敬一、坂口晃男、森 伸幸
事務局 教育委員会・社会教育主事、大原善和主事

発掘参加者 赤間秀男、岩沢和夫、岩沢博之、岩沢昇、鶴沢不二夫、大木まもる、小川さだ、
大竹きくえ、大場真理子、川村洋子、川島とみ子、黒川清、小山とり、佐瀬くに、桜井登美子、
齊藤みき、鹿瀬忠俊、鹿瀬孝、鈴木博、鈴木四郎、鈴木延子、鈴木和子、鈴木圭子、鈴木正子、
杉浦与一、曾根玲子、鶴岡俊、豊田まさ子、錦織圭吾、錦織とよ、八角憲章、早野なか、弘中
智之、平岡龍子、藤原省吾、堀越浩二、星秀子、松本幸雄、水落ヤエ、宮下よし子、元橋節義、
森伸幸、矢口あきら、吉田豊

整理参加者 浅野葉子、石井百々子、石井洋子、高橋詩子、戸村三雄、根本時子、八角憲章、
平岡龍子、丸静江、水落ヤエ、阿部清江、内野洋子、小林弘之、山崎勝美

第三章 調査の経過と概要

第一節 調査の方法

池ノ台遺跡の発掘調査の方法は、川崎山遺跡と同様にグリッド法を採用した。発掘調査区は、本遺跡の立地する台地のほぼ中央部よりやや北側を東西に幅20m、全長210mを10m×10mの区画を1区として42グリッドを設定した。10mのグリッドは、N(北)区、S(南)区と分けて、北東隅から北西隅へ算用数字の1~21をつける。

調査は東側より連続する2個のグリッドを同時に排土し、第2層(ソフトローム)上面において、遺構の有無を確認しつつ、遺構が検出された場合は確認面で止め、それ以外はソフトローム層上面まで掘り下げた。遺物の取り上げは、1点づつ平面図に記録し、表土層からの出土遺物、あるいは大きな擾乱層より出土した遺物は一括して取りまとめるにした。

遺構の場合は、住居址では十文字に土層断面図作製用のベルトを残し、四分法で調査を進めた。なお住居址の平面図、断面図等の図面類は20分の1として、カマドは10分の1で作製した。但し、火災住居址については、10分の1の道り方測量を実施した。土塙、柱穴、溝状遺構は、いずれも20分の1とした。

第二節 土層

本遺跡の土層は、基本的に第1層(表土層)、第2層(ソフトローム)となっており、川崎山遺跡と若干異なり、黒色土層が存在せず、表土層の下はソフトロームになっている。調査区は最近まで畑地として使用されていたため、耕作機による擾乱が著しく、場合によっては、ハードロームまで擾乱を受けている。

また、表土層中に包蔵する遺物は、量的には数多くはあるが、N(10~12)グリッドに集中する傾向が見られ、その時期は縄文時代中期の土器群が主体を占める。

第三節 日誌抄

8月11日~8月12日

調査に必要な器材等の運搬、調査対称区域を一部除草する。

8月13日~8月16日

調査区域のはば中央部に宅地跡、盛土があり、その為、重機による排土を開始する。

8月17日~8月25日

グリッド設定。調査区東側台地先端部のグリッドより表土層の排土を開始する。

8月26日~8月31日

表土層の排土を終了。

遺構のプランの確認を中心に作業を進める。

9月1日~9月2日

遺構の確認はほぼ完了する。その遺構は、竪穴住居址5軒、掘立柱遺構1軒、隅丸遺構1軒、炉址状遺構1基、土塙17基、溝状遺構1本を検出したので、それぞれ遺構番号をつける。

9月3日

第1号・第4号住居址、及び土塙の調査を開始する。第2号・第3号住居址の新旧関係の確認を開始する。

9月4日

第1号・第4号住居址及び土塙の調査の継続。第3号住居址の調査を開始する。

9月5日～9月8日

第1号・第4号住居址平板実測後、写真撮影及びエレベーション実測を行なう。第3号住居址継続調査、掘立柱遺構の調査開始。

9月9日～9月10日

第1号・第4号住居址、カマド調査を行なう。掘立柱遺構のエレベーション実測後に写真撮影をもって終了。3号住居址のカマド調査を行なう。

9月12日

第1号・第4号住居址調査終了。第5号住居址の火災住居址の調査を行なう。

9月13日～9月17日

第3号住居址カマド調査を終了。第2号住居址の調査を行なう。第5号住居址炭化物の出土状況を確認の為覆土内の遺物を取り上げる。

9月18日～9月25日

第5号住居址の炭化物検出作業及び写真撮影・実測をする。8月23日以来の土塙の調査をすべて終了する。

9月26日～9月30日

第5号住居址カマド調査を行なう。溝状遺構の調査を開始する。

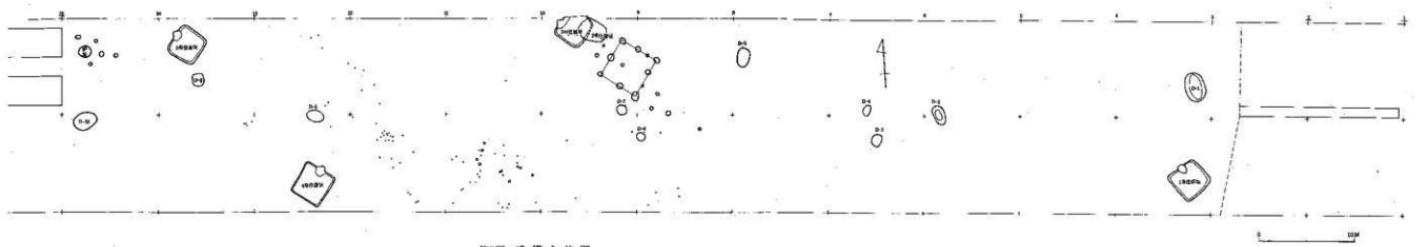
10月1日～10月5日

第5号住居址、溝状遺構の調査を終了する。遺構全測図の作成を開始する。N-15のグリッドの無土器時代の確認調査を開始する。

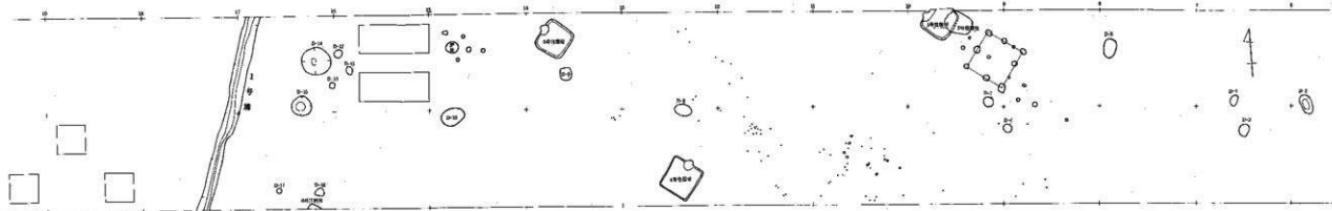
10月6日

すべての調査を終了する。

(平岡)



第2図 通構全体図



第2図 造構全体図

第四章 遺構と遺物

住居址

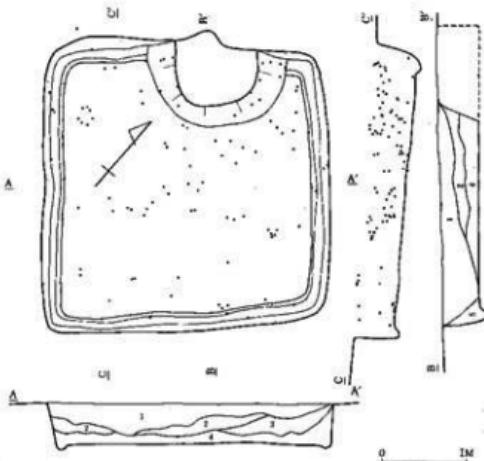
第1号住居址（第3図 写真図版3）

S-3区で確認したものである。平面形は方形を呈するもので、正方形に近いが北側辺のゆがみがひどく、台形に近い正方形状となっている。これは東側辺が西側辺にくらべて約30cm程短いために生じたもので、この誤差が北側辺に集積されたために変形したと考えられる。長軸の方向は磁北より約40度西に傾いている。平面規模は輪長約350cm×340cmとなり比較的小型の住居址である。掘り込みは約49cmと深く、遺存状態は良好であり、壁は垂直に立ちあがっている。壁構は住居址の全周にわたって認められたが、柱穴は一本も発見されていない。これは柱そのものが存在しなかったと見るよりは、掘り方を残さない何らかの方式が使用されていたと考えるのが自然であろう。カマドは北側辺の中央より東寄りの所に設置されている。

住居址内の埋没土層は次のとおりである。

- 1層 暗褐色土層 粒子粗く粘性なし。ロームを多く含む。
- 2層 暗褐色土層 黒色土、焼土、山砂、粘土を混入する。
- 3層 暗褐色土層 粒子粗くロームを混入する。1層より明るい。
- 4層 暗褐色土層 粒子細かく粘性あり。少量の焼土粒子を含む。
- 5層 明褐色土層 4層に酷似する。1層よりしまり悪い。

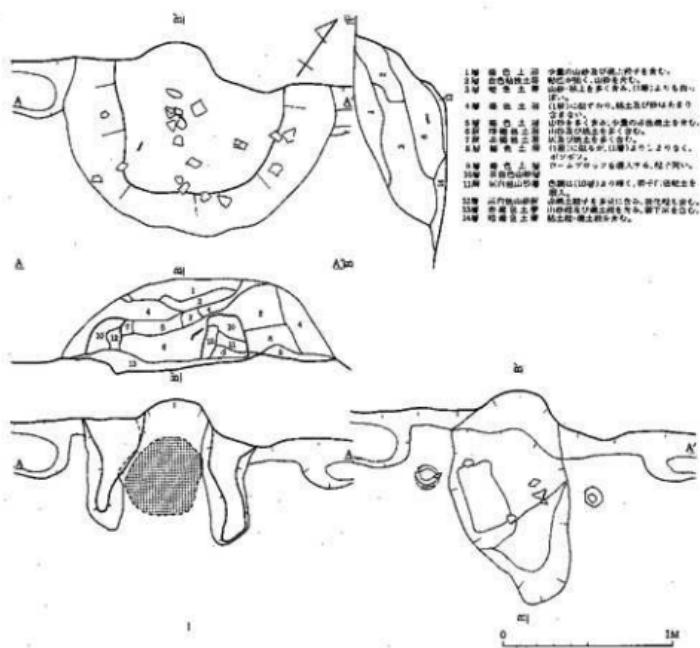
覆土の中でも2層中の山砂はカマドの崩壊に伴うものと考えられ、4層中の焼土についても、カマド内の焼土が流出したものと考えられる。



第3図 第1号住居址実測図

カマド (第4図 写真図版3, 4)

北側の中央よりやや東寄りの所に設置され、北壁の壁面を一部抉り取り煙道として本体を
竪穴内部に置く構築である。天井部は崩落し流出している。規模は93cm×85cm。壁への切り込
みは、43cm×12cm。袖部は山砂・褐色土の混合土を基礎とし、右側は幅23cm、高さ25cm。左側
は幅19cm、高さ19cm。内壁は全体に良好な遺存状況を示している。焚出部は、焚口幅55cm。燃
焼部は浅い皿状を呈す。46cm×42cm、深さ5cm。煙道部は約40度に立ち上がる。



第4図 第1号住居址カマド実測図

第2号住居址 (第5図 写真図版5, 6)

N-9区で確認したものである。第3号住居址の南東部を壊し、構築したものである。平面形は椭円形を呈し、平面規模は軸長約275cm×230cmを測る。堀り込みは約20cmと浅く、壁はなだらかに立ち上がる。壁溝、柱穴、カマド等は発見されなかった。

住居址内の埋没土層は次の通りである。

1層 暗褐色土層

ローム粒子、ロームブロックを少量含む。(東側は西側より暗い)

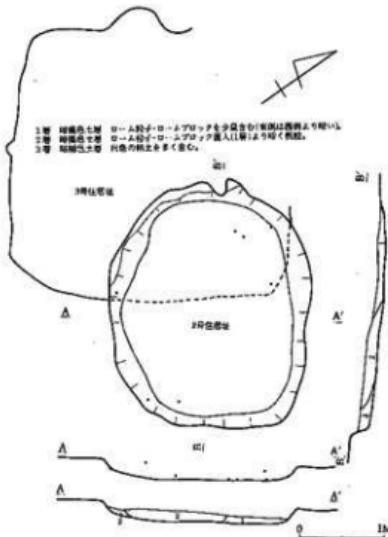
2層 暗褐色土層

ローム粒子、ロームブロック混入、1より暗く粗粒。

3層 暗褐色土層

白色の粒土を多く含む。

覆土の埋没状況は土層断面の観察では自然堆積によるものと判断できる。本址はここでは、住居址として取り扱ったが、壁溝、柱穴、カマドなどがない、むしろ住居址とは異なる性格、機能をもつ構造体と思われる。



第5図 第2号住居址実測図

第3号住居址 (第6図 写真図版5)

N-9区で確認したものである。平面形は方形を呈するもので、北側隅部分が削られているが、ほぼ正方形に近い形になるものと考えられる。これは残った三隅部の角度が、直角に近い角度ではほぼ等しいことから推定できよう。長軸の方向は磁北より約46度西に傾いている。平面規模は約320cm×335cmとなり比較的小型の住居址である。堀り込みは約40cmと深く、上方でやや開きぎみとなる壁となっている。壁溝は住居址の周間に認められたが柱穴は一本も発見されなかった。この住居址の柱穴も第1号住居址と同様のあり方をしていたものと考えられる。カマドは北側辺の中央よりやや西寄りの所に設置されている。

住居址内の埋没土層は次のとおりである。

1層 暗褐色土層 粒子が細かくロームブロックを若干含む。

2層 暗褐色土層 色調は1層より明るくロームブロックを多く含む。

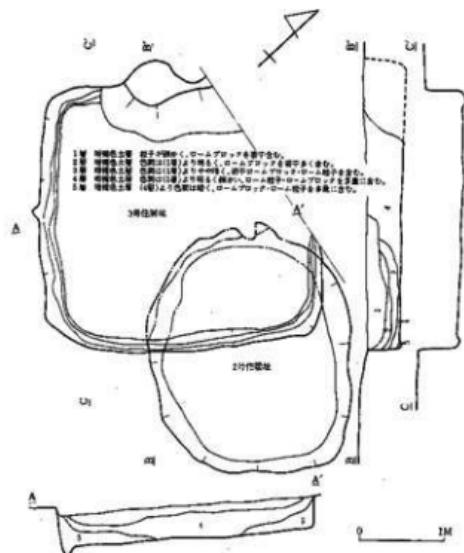
3層 暗褐色土層 色調は1層よりやや暗くロームブロック・ローム粒子を若干含む。

4層 暗褐色土層 色調は1層より明るい。粒子が細かくローム・ブロック・ローム粒子を多量に含む。

5層 暗褐色土層 色調は4層より暗くロームブロック・ローム粒子を多量に含む。

覆土中に含まれるロームブロック・ローム粒子の存在はこの住居址が自然な状態によって埋没したと解釈するほかに、人為的な行為によって埋没したのではないかという疑問を想起させ

る。また本住居址は南側で第2号住居址と重複関係を有しているが、これは第2号住居址が第3号住居址よりも後に設営されたものである。



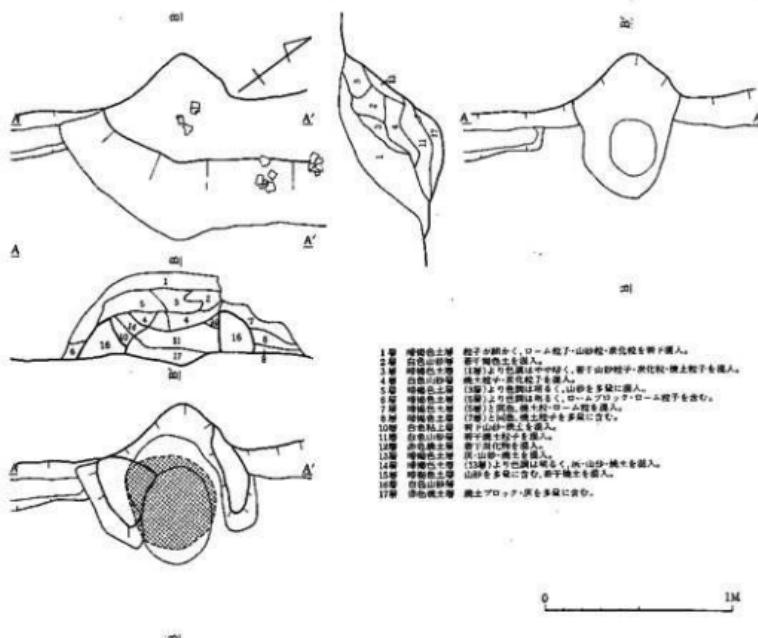
第6図 第3号住居址実測図

カマド（第7図）

北辺部の中央よりやや西寄りの所に設置されている。第1号住居址のカマドと同様に北壁の壁面を一部抉り取り煙道としている。本体は堅穴の内部に置く遺存状態は天井部の一部が崩落し流しているものの良好である。規模は90cm×68cm。壁への切り込みは60cm×23cm。袖部は山砂・褐色土・ロームブロックの混合土を基礎とし、右幅18cm、高さ22cm。左幅22cm、高さ20cm。内壁は全体に遺存良好である。焚出部は焚口幅33cm。燃焼部は鍋底状を呈し深くなり。45cm×48cm。深さ8cm。煙道部は約49度を測りほぼ直線的に立ち上がる。

第4号住居址（第8図）

S-12区で確認したものである。平面形は方形を呈するもので、ほぼ正方形となっている。4辺とも多少の凸凹はあるがほぼ直線上となり4隅の角度も直角に近い角度を保っている。長軸の方向は磁北より約42度東に傾いている。平面規模は約355cm×345cmとなり比較的小型の住居址である。掘り込みは約25cmと浅くなっているが、壁の立ち上がりは垂直に近くしっかりした状態となっている。壁溝は住居址を全周している。柱穴は一本も発見されなかった。こ



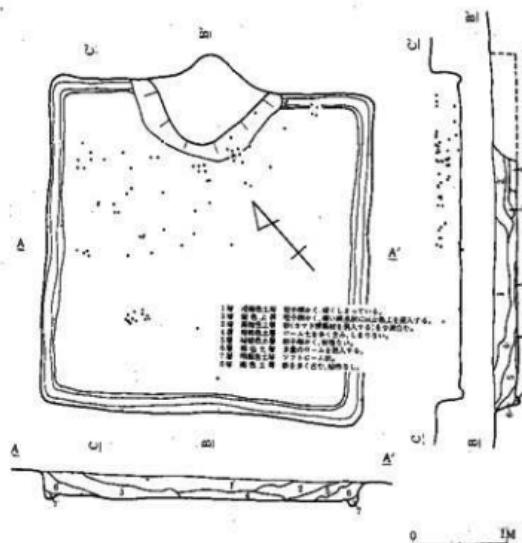
第7図 第3号住居址カマド実測図

の点では第1号・第3号の住居址と同様であるが、カマドは北側辺のほぼ中央に設置されており、西側に位置する前述した住居とは異なる。

住居址内の埋没土層は次のとおりである。

- 1層 暗褐色土層 粒子が細かく硬質である。
- 2層 褐色土層 粒子が細かく硬質である。斑点状に灰白色土を混入する。
- 3層 黒褐色土層 砂を少量含む。砂はカマドの構築材として使用されたものである。
- 4層 暗褐色土層 ロームを多く含み、土にしまりがない。
- 5層 暗褐色土層 粒子が細かく粘性をもたない。
- 6層 褐色土層 ロームを多量に混入する。
- 7層 明褐色土層 ソフトローム状を呈す。
- 8層 褐色土層 砂を多く含む。粒性をもたない。

覆土の埋没状況は、土層断面の観察では自然堆積によるものと判断できよう。壁際から床面上へと統く6層の存在はこのことを顯著なもの語っている。またカマドは6層の堆積とほぼ同一時期に崩壊し始め、それから後にも崩壊し続けたことが3・8層の存在から確かめられる。



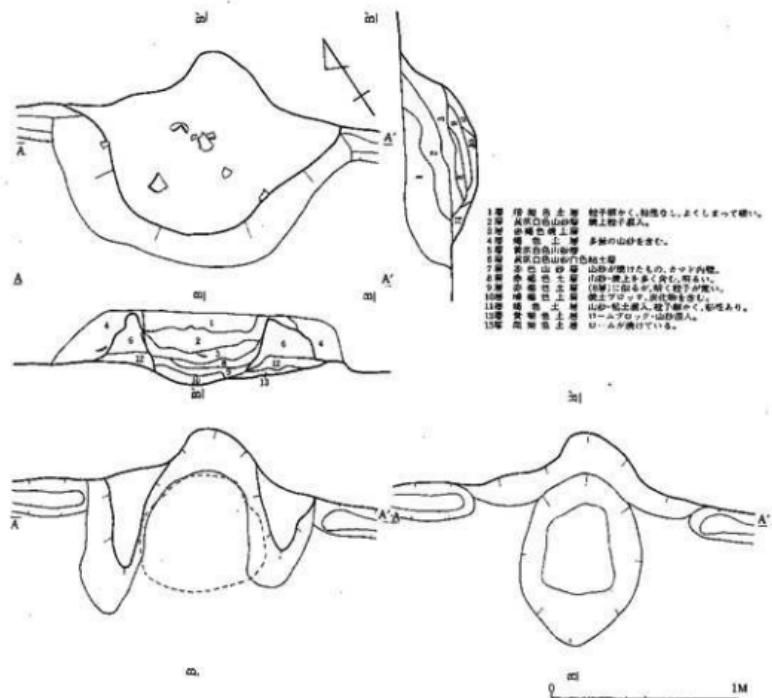
第8図 第4号住居址実測図

カマド（第9図 写真図版7）

北側辺のほぼ中央に設置されている。第1号・第3号住居址のカマドと同様な構築である。遺存は良好であるが、天井部は完形に崩落し流出している。規模は $119\text{cm} \times 100\text{cm}$ 。袖部は山砂、粘土、褐色土、ロームブロックの混合土を基礎とし、右幅30cm、高さ27cm。左幅21cm、高さ27cm。内壁は遺存が良好。焚出部は焚口幅61cm。燃焼部は皿状を呈す。 $64\text{cm} \times 61\text{cm}$ 。深さ6cm。煙道部は約23度を測り直線的に立ち上る。

第5号住居址（第10図図版）

N-13区で確認したものである。平面形は方形を呈するもので、ほぼ正方形となっている。4辺とも中央部が外へ張り出し胴張り状となっている。4辺の長さもほぼ等しく、4隅の角度も直角に近い値となっている。長軸の方向は磁北より約76度西に傾いている。主軸が北西方向を向く点では第1・第3号住居址と類似点が見出せるが、その偏角の大きさによって両者とは異った印象をいだかせる。北西とするよりは西と見た方がよりふさわしいようである。平面規模は約 $330 \times 320\text{cm}$ となり比較的小型の住居址である。掘り込みは西側で約50cm、東側で約35cmと深い。壁の立ち上りは垂直に近くしっかりした状態となっていて、東壁、南壁では壁の中段より下が張り出したオーバーハング状を呈している。これは壁溝を構築する場合に壁の中段より下側を斜めに外へ掘り込み壁溝とするものでこの時期に特徴的な工法の一つである。壁溝は住居址の全周をめぐっていて、東壁、西壁では掘り込みがしっかりしているのに対し、



第9図 第4号住居址カマド実測図

南壁・北壁では内側の立ち上がりがはっきりせず、だらだらとしたものになっている。柱穴は南西隅部に1本、北壁中央寄りに1本、床面中央南壁よりに1本、計3本が発見されている。3本の柱穴はいずれも主柱穴としては認定しにくいものであり、床面中央の小柱穴に至っては屋根をささえる構造体としての機能を疑うものである。他の2本の柱穴は副柱穴となるべき性質のものであろうと考えられるが、この位置にある副柱穴がどのように屋根を支えるかについては疑問が残るが皿状のピット内に立位の状態で炭化材が出土している事も見逃せない。カマドは西壁中の央よりごくわずか北寄りに設置されている。

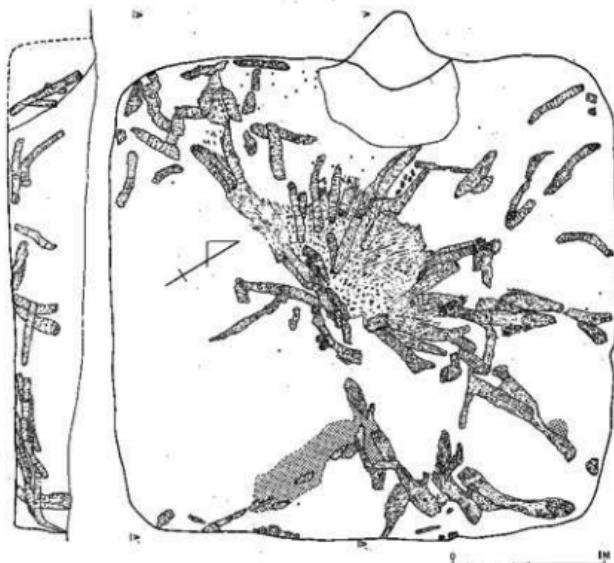
住居址内の埋没上層は次のとおりである。

- 1層 褐色土層 ローム粒子、黒色粒子を多く含む。粘性がなくしまりもない。
- 2層 明褐色土層 ソフトロームを多量に含む。
- 3層 褐色土層 白色粘土と砂を少量含む。
- 4層 灰褐色土層 山砂層である。
- 5層 暗褐色土層 少量の炭化物を含む。しまりなく粘性もない。
- 6層 褐色土層 粘子か細かく粘性はない。ロームを含ます。

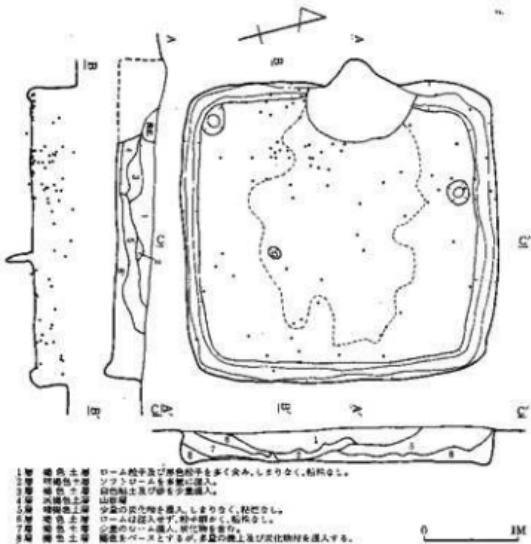
7層 棕色土層 少量のロームと炭化物を含む。

8層 棕色土層 棕色土を基盤とし、多量の焼土と炭化材を含む。

当住居址は焼失住居址であるので、土層と炭火材との関係について少し見ていってみよう。まず土層から見ると炭化物は5層・7層・8層の各層に含まれている。8層は壁際から床面上の大部分を覆う層であり、5層・7層はその上に堆積した土層である。これは通常いわれている三角堆積とその上の土層として解釈できる。この三角堆積土層中に炭化材と焼土を含むのであるから当住居址の焼失と埋没とは同一時期であったと考えられる。炭化材がいずれも丸太材であり、壁際から床面中央部にかけてすべりこむように入りこんでいること、床面中央部の炭化材に混ってカヤが出土していることからこの丸太状炭化材は屋根の檼材であった可能性が強い。とすれば、東・西・北の壁際から床面中央部に向って放射状に並ぶ平面状態は屋根の焼失による檼材の落下状況と見れなくもない。仮に屋根だと仮定するならば住居址の埋没は焼失と同時に開始されたわけであり、8層の土層全体を焼失によって生じた埋土とみなすこともできるわけである。ただこの場合、住居址内に住人が生活を営んでいる時に焼失した、つまり火災であるのか住人が去って空家になってから焼失（焼却）したのか判然としない。筆者はこの時期の家屋が意図的に焼却された可能性も考える。



第10図 第5号住居址炭化物分布図



第11図 第5号住居址実測図

カマド (第12図 写真図版11)

西側壁の中央より北寄りに設置されている。構造は各住居址と同様である。遺存状態は極めて良好である。規模93cm×72cm。壁への切り込みは72cm×26cm。袖部は山砂、粘土、褐色土、植物纖維の混合土を基礎として右幅19cm、高さ33cm。左幅21cm、高さ41cm。内壁は全体に遺存良好。焚出部は焚口幅38cm、燃焼部は浅く皿形を呈す。57cm×56cm。深さ9cm。煙道部は約43度に立ち上がる。

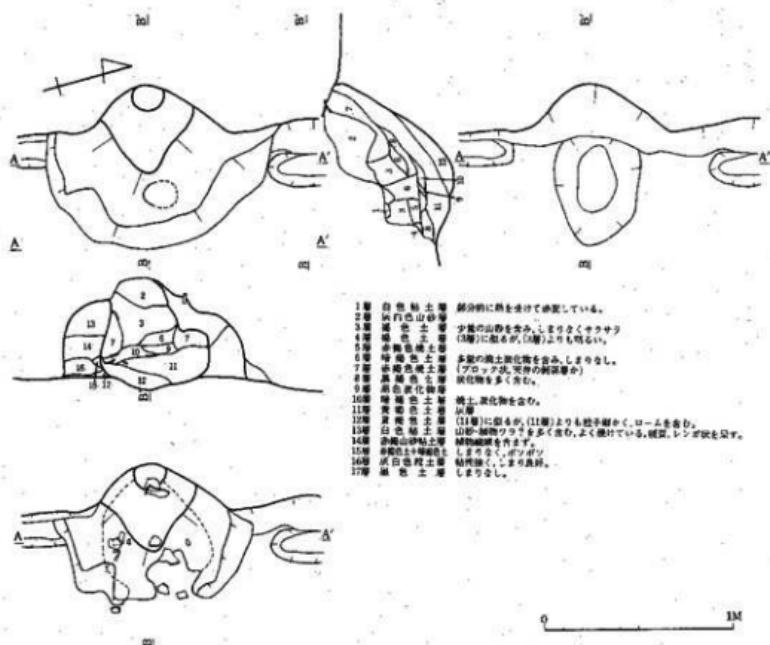
第6号住居址 (第13図)

S-16区で確認したものである。北東コーナーのみ調査区内の為、平面形、規模等は不明である。壁溝は認められた。住居址内の埋没層は次のとおりである。

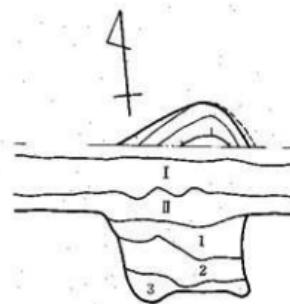
- 1層 暗褐色土層 ロームブロックローム粒子を含む
- 2層 暗褐色土層 (1)より色調は暗く、若干ロームブロックを含む
- 3層 暗褐色土層 色調は(2)と同色、山砂を多量に含む

第1号堀立柱建物址 (第14図 図版12)

N-8・9区で確認したものである。構造は3間(422)×2間(422cm)の堀立柱建物址である。掘り方は不整円形で、径は60cm内外である。掘り方の埋土が单一な暗褐色土であるために柱跡は確認できなかった。柱穴群内の総積面積は17.38m²を測る。

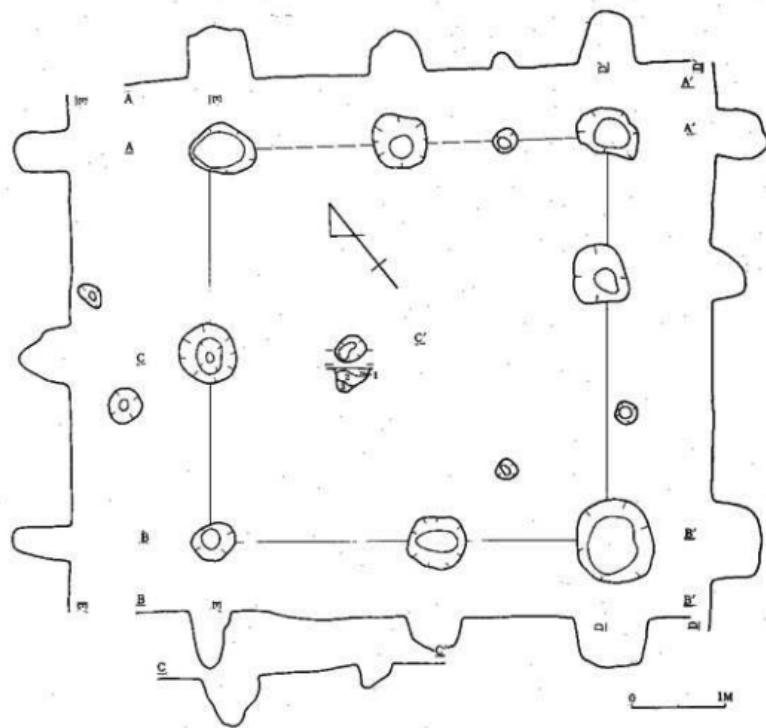


第12図 第5号住居址カマド実測図



1層 暗褐色土層 ロームブロック・ローム粒を含む。
2層 暗褐色土層 (1層)より色調は暗く、若下ロームブロックを含む。
3層 暗褐色土層 色調は(2層)と同色。山砂を多量に含む。

第13図 第6号住居址実測図



第14図 堤立柱造構実測図

土 塙

第1号土塙 (第15図 写真図版14)

S-3区で確認したものである。いわゆる落し穴状の土塙である。平面形は楕円形となる。平面規模は 290 cm × 210 cm である。長軸方向の壁は上部が垂直に近く、中段より下側が外に張り出しいわゆるフラスコ状となる。これに対して短軸方向の壁は垂直に近い急な傾斜をもって直線的に下っている。塙底は平坦であるが中央部でわずかに低くなる傾向がある。柱穴状の掘り込みはもない。確認面からの深さは約 225 cm である。土塙内の堆積土層は次のとおりである。

- 1層 褐色土層 粒子細かくしまり良好
- 2層 暗褐色土層 ローム粒子少量混入、しまり良好
- 3層 暗褐色土層 少量のローム粒子、黒色土混入、粒子細かくしまり良好
- 4層 暗褐色土層 ローム粒子多量に混入、粗粒でしまり悪い。

- 5層 褐色土層 暗褐色土少量混入。やや粗粒である。
6層 褐色土層 ロームブロック少量混入。粗粒で、やわらかい。明るい。
7層 褐色土層 硬質で粘性があり、光沢がある。ロームブロックを含む。
8層 褐色土層 ロームブロックと暗褐色土を少量ずつ含む。粗粒状でやわらかい。
9層 褐色土層 硬質で粗粒、ロームブロックを少量含む。
10層 褐色土層 ロームブロック・ローム粒子を含む。粗粒状。
11層 黒褐色土層 粒子細かく粘性あり。

本土塙から時期の決めてとなる遺物の出土はないが、形態的特徴から縄文時代に属するものと思われる。

第2号土塙 (第15図)

S・N-5区で確認したものである。いわゆる落し穴状の土塙である。平面形は橢円形となる。平面規模は205cm×120cmである。長軸方向の壁は急な斜面となっていて中間に一段テラス状の傾斜変換面をもつ。短軸方向の壁も同様に中段でテラス状のくずれたものをもつ。このようなテラスの存在は土塙を掘る時点で、上部の土塙のみを一回掘り上げ、後にその塙底を再度掘り下げるという行為によって形成されたものと想像できる。これは径に対して深さの深い土塙を掘る上での一技術とも考えられるのである。塙底は平坦である。柱穴状の掘り込みはもたない。確認面からの深さは約142cmである。

土塙内の堆積上層は次のとおりである。

- 1層 褐色土層 粒子細かくしまり良好。
2層 暗褐色土層 ローム粒子を少量含み粒子細く、しまり良好。
3層 暗褐色土層 ローム粒子を基盤とし、暗褐色土がこれに混入する。
4層 暗褐色土層 ローム粒子の混入が、2層より多く、粗粒でしまり良好。
5層 暗褐色土層 ローム粒子を基盤とし、少量の暗褐色土を混入する。しまり良好。
6層 暗褐色土層 暗褐色土を基盤とし少量のローム粒子を混入する。しまり良好。
7層 暗褐色土層 細かい粒子を多量に含み、しまり良い。
8層 暗褐色土層 ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。黒色粒子をわずかに含む。
しまり悪い。

本土塙も時期決定の決めてとなる遺物は出土していないが、形態的特徴から縄文時代に属するものと思われる。

第3号土塙 (第15図)

N-6区で確認されたものである。浅い鍋底状の土塙である。平面形は不整円形となる。平面規模は130cm×110cmである。壁の立ち上がりもはっきりせず、底も凸凹がはげしい。深さは32cmである。堆積上層は2層に分ける。

- 1層 暗褐色土層 粒子細かく粘性なし。
2層 褐色土層 粒子細かくロームを多量に含む。
時期不明である。

第4号土塙 (第15図 写真図版16)

S-6区で確認されたものである。浅い鍋底状の土塙である。平面形は橢円形となる。平面規模は118cm×71cmである。底と壁との区別がつけにくい。深さ17cmを測る。塙底は平坦である。堆積土層は3層に分かれる。

- 1層 暗褐色土層 粒子細かくしまりあり。
2層 褐色土層 粒子細かくしまりあり。ローム粒子少量含む。
3層 褐色土層 ローム粒子を多量に含みしまり悪い。

第5号土塙 (第16図 写真図版16)

N-7区で確認されたものである。いわゆる落し穴状の土塙である。平面形は橢円形となる。平面規模は192cm×118cmである。長軸方向の壁の南壁と短軸方向の壁には第1号土塙でのべたテラスが認められる。塙底は平坦であり、柱穴状の掘り込みはもたない。深さは約137cmを測る。堆積土層は次のとおりである。

- 1層 暗褐色土層 ロームブロック・ローム粒子を少量含む。粒子が細かい。
2層 暗褐色土層 ロームブロック・ローム粒子を多く含む。色調明るい。
3層 暗褐色土層 ロームブロック含む。色調明るい。
4層 暗褐色土層 粒子細かく非常に硬い。
5層 暗褐色土層 ロームブロックを含み色調明るい。

時期の決めてとなる遺物の出土はないが、形態的特徴から縄文時代に属するものと思われる。

第6号土塙 (第15図)

S-8区で確認されたものである。浅い鍋底状の土塙である。平面形は略方形となる。平面規模は87cm×79cmである。壁の立ち上がりははっきりして、深さ23cmを測る。塙底は平坦である。堆積土層は6層に分かれる。

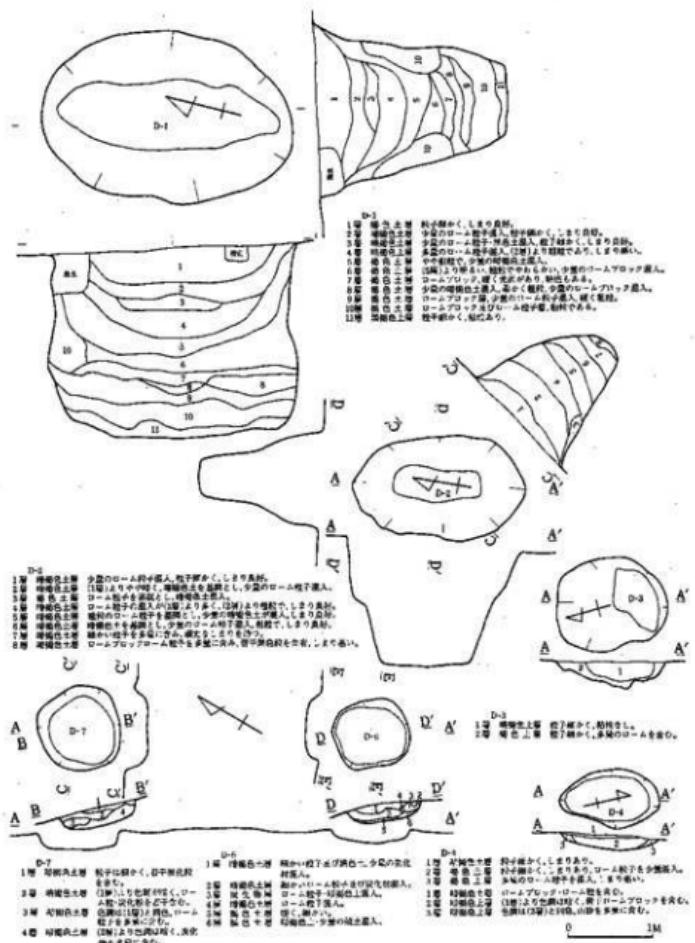
- 1層 暗褐色土層 ローム粒子・黒色土を含み、少量の炭化材が混入する。
2層 暗褐色土層 ローム粒子・炭化材が混入する。
3層 炭化物層 暗褐色土とローム粒子を含む。
4層 暗褐色土層 ローム粒子を含む。
5層 褐色土層 硬質で細粒。
6層 暗褐色土層 烧土を少量含む。

本土塙も時期不明の土塙であるが、第7号土塙と同じく掘立柱に近く、炭火物を含む点でも

同一である。掘立柱群との関連の深い土塙である可能性が強い。

第7号土壤 (第15図)

N-S-9区で確認されたものである。浅い鍋底状の土壠である。平面形は円形となる。平面規模は100cm×100cmである。壁は浅いながらもはっきりとしてて深さ23cmを測る。塙底は



第15圖 土坡丈量圖

平坦である。堆積土層は4層に分かれる。

- 1層 暗褐色土層 粒子細かく炭化物を少量含む。
- 2層 暗褐色土層 色調暗く、ローム粒、炭化粒を少量含む。
- 3層 暗褐色土層 ローム粒子を多量に含む。
- 4層 暗褐色土層 色調暗く炭化物を多量に含む。

本土塙は時期不明の土塙であるが、掘立柱群の近くにあり、炭化物を多量に含むことなどからして、掘立柱群との関連の深い土塙である可能性が強い。

第8号土塙 (第16図)

N・S-12区で確認されたものである。いわゆる落し穴状の土塙である。平面形は橢円形となる。平面規模は165cm×115cmである。長軸方向の西壁にはテラスが認められるが、残りの壁は、直線状に急傾斜でおちていく。塙底は凸凹である。中央部がわずかに盛り上がっている。柱穴状の掘り込みはもない。深さは約185cmを測る。堆積土層は次のとおりである。

- 1層 暗褐色土層 ローム粒子を多量に含む。しまり良し。
- 2層 暗褐色土層 ローム粒子少量含む。色調明るい。
- 3層 暗褐色土層 ロームブロック少量含む。色調明るい。
- 4層 黄褐色土層 ロームブロック・ローム粒子を少量含む。
- 5層 黄褐色土層 大ロームブロックを多量に含む。しまり悪い。
- 6層 黄褐色土層 大ロームブロックを多量に含む。
- 7層 黄褐色土層 ロームブロック・ローム粒子を含む。色調は暗い。
- 8層 暗褐色土層 ローム粒子を多量に含む。やや粘性あり。

本土塙も形態上からみて縄文時代に属するものと思われる。

第9号土塙 (第16図 写真図版17)

N-13区で確認されたものである。浅い方形の土塙である。平面規模は115cm×113cmを測る。塙底は中央部がわずかにくはむ。深さは約32cmを測る。覆土中に形のはっきりした炭化材3本を含む。5号焼失家屋の近くにあり、同住居址の屋外土塙とも考えられる遺構である。

第10号土塙 (第16図 写真図版17)

N・S-14区で確認されたものである。浅い掘り込みのはっきりしない土塙である。橢円形を呈し、平面規模は253cm×175cm、深さ13cmを測る。時期は不明である。

第11号土塙 (第16図 写真図版20)

N-15区で確認されたものである。浅い鍋底状の小土塙である。平面形は円形となり平面規

横は 73cm × 73cm である。壁と底との区別がはっきりとしない。堆積土層は 3 層に分かれる。

- 1 層 暗褐色土層 ローム粒少量含む。粒子細かくしまり良好。
- 2 層 暗褐色土層 ロームブロック・ローム粒子含む。色調明るい。しまり良好。
- 3 層 暗褐色土層 ロームブロックを多量に含む。色調は明るい。

第12号土塙 (第16図)

N-15区 確認されたものである。略方形の土塙である。平面規模は 85cm × 81cm を測る。底はほぼ平坦であるが、わずかに中央部がくぼんでいる。深さは約 45cm を測る。掘立柱群の近くにあり、それとの関連を考えられる土塙である。

第13号土塙 (第16図)

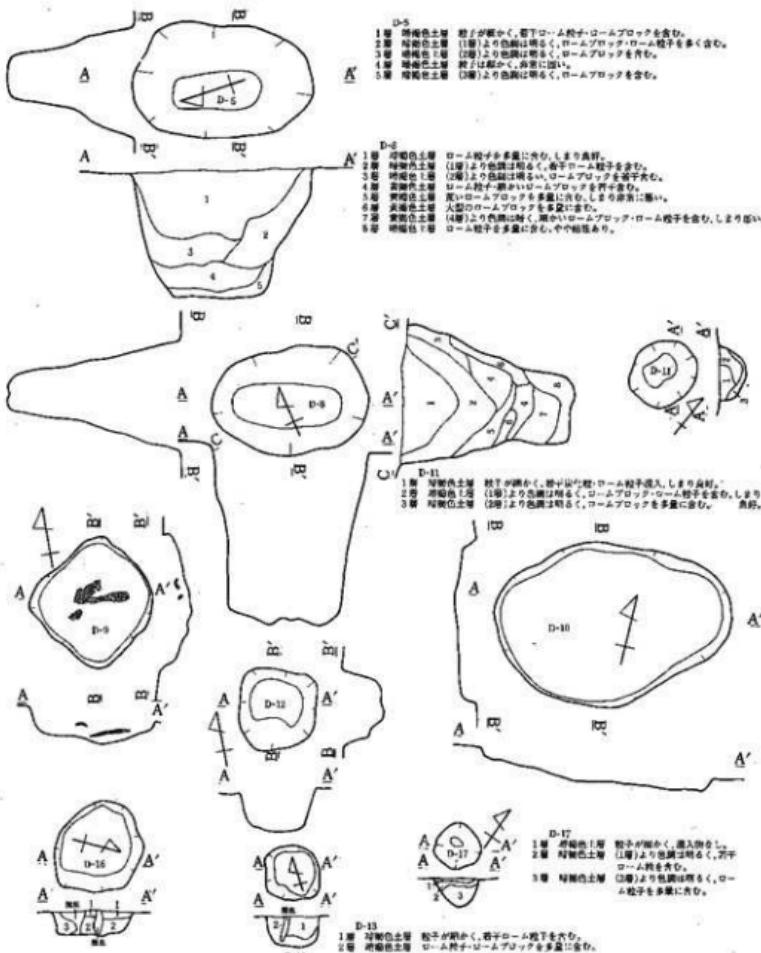
N-16区で確認されたものである。浅い鍋底状の土塙である。平面形は略方形となる。平面規模は 60cm × 55cm である。壁の立ち上がりはしっかりとしていて深さ約 33cm を測る。底は平坦である。堆積土層は 2 層に分かれる。

- 1 層 暗褐色土層 ローム粒子を少量含み粒子細かい。
- 2 層 暗褐色土層 ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。本土塙は時期不明である。

第14号土塙 (第17図)

N-16区より確認したものである。ロームを覆土にもつ土塙で平面形はほぼ円形を呈する。径幅 305cm、深さは掘り込み面から最深で 135cm を測る。断面はすり鉢状を呈するが、壁は凸凹が激しい。堆積土層は 12 層に分かれる。

- 1 層 暗褐色土層 ローム粒子混入。
- 2 層 黄褐色土層 (1)より明るい。
- 3 層 黄褐色土層 暗褐色混入。
- 4 層 黄褐色土層 (3)より明るい。ロームブロック混入や粗粒。
- 5 層 黄褐色土層 少量ロームブロック、暗褐色混入。
- 6 層 黄褐色土層 ロームブロック混入。
- 7 層 暗褐色土層 ロームブロック混入。
- 8 層 暗褐色土層 ローム粒子・ロームブロック混入。
- 9 層 暗褐色土層 ロームブロックを多量に含み、しまりなし。
- 10 層 褐色土層 ロームブロックを多量に含み、少量の暗褐色混入。
- 11 層 暗褐色土層 ローム粒子、ロームブロック、黒色土混入。
- 12 層 黄褐色土層 暗褐色土、黒色土、ローム粒子混入。



0 1M

第16図 土壌実測図

第15号土塙 (第17図 写真図版19)

N-16区より確認したものである。平面形は略円形となる。平面規模は 205cm × 195cm である。深さは掘り込み面から最深で 60cm を測る。断面は深い鍋底状を呈し、底は平坦である。

堆積土層は5層に分かれる。

1層 暗褐色土層 ローム粒子・炭化粒を若干含む。

2層 暗褐色土層 (1)より色調は明るく、ローム粒子を多量に含む。

3層 暗褐色土層 (2)より色調は明るく、若干焼土粒子を含む、しまり良好。

4層 黄褐色土層 若干焼土粒子を含む。

5層 暗褐色土層 炭化粒・焼土を多量に含む。色調は(1)より暗い。

本土塙は、底に面した覆土に多量の炭化粒・焼土を含む。また焼土・炭化物を含む土塙との関連があると考えられる。

第16号土塙 (第16図 写真図版20)

浅い鍋底状の土塙である。平面形は略円形となる。平面規模は100cm × 94cmである。壁の立ち上がりはしっかりしていて深さ27cmを測る。底は平坦である。堆積土層は3層に分れる。

1層 暗褐色土層 ローム粒子少量含む。粒子細かく、しまり良好。

2層 暗褐色土層 ローム粒子を多量に含む。色調は(1)より明るい。

3層 暗褐色土層 色調は(2)より明るい。

本土塙の時期は不明である。

第17号土塙 (第16図)

柱穴状の小土塙である。円形を呈し40cm × 50cm、深さ約31cmを測る。堆積土層は3層に分れる。

1層 暗褐色土層 粒子細かい。

2層 暗褐色土層 ローム粒子少量含み、色調は明るい。

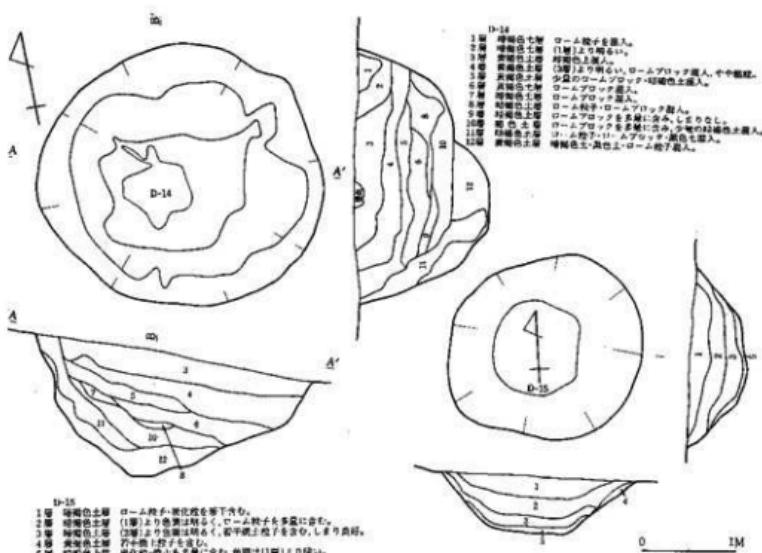
3層 暗褐色土層 ローム粒子を多量に含み、色調は明るい。

本土塙は時期不明である。

炉址状造構と周辺ピット

N-14区より確認したものである。ここでは、形態的に炉として使用されたものと考え、炉址状造構として取り扱うこととした。平面形は横円形を呈し、規模は長軸70cm、短軸65cmの横円形の範囲にみられ、厚さ6cmほどである。焼土下は2層に分けられ、焼土粒子を含む褐色土層である。遺物は焼土のはば中央より杯形土器が出土した。

炉址を中心として、5個のピットがほぼ半円形状に発見された。ピットの規模・形態については表1に示したので参照していただきたい。



第17図 土壌実測図

ピット群

S-3区より確認されたもので、総計10個のピットにより構成されている。それぞれのピットは、ほぼ円形のプランを呈し、直徑は30cm内と非常に小規模である。ピットの規模については表2に示したのを参照していただきたい。形態については、円筒形で深く、幅が狭いもの(9)、浅いもの(2, 4)、柱穴状を呈するもの(1, 2, 10, 8)とバラエティーに富んでいる。分布状況では、掘穴柱建築址、柵等の施設的な配列を示すものとは、考えられない。

ピット群より時期を推定する遺物が出土していない。

No	長径	短径	深さ	底径
炉址	70	65	12	42
1	60	37	32	28
2	40	35	45	30
3	50	45	32	35
4	60	52	45	40
5	70	42	30	20

(単位はcm)

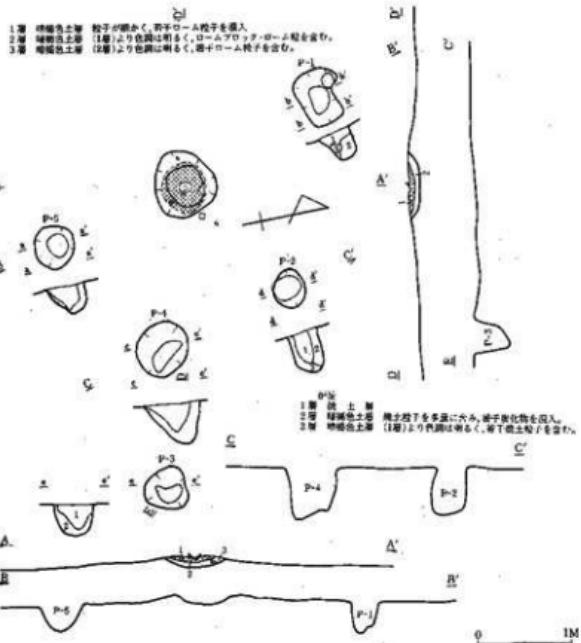
第1 炉址及びピット計測値表

表2 ピット群計測値表

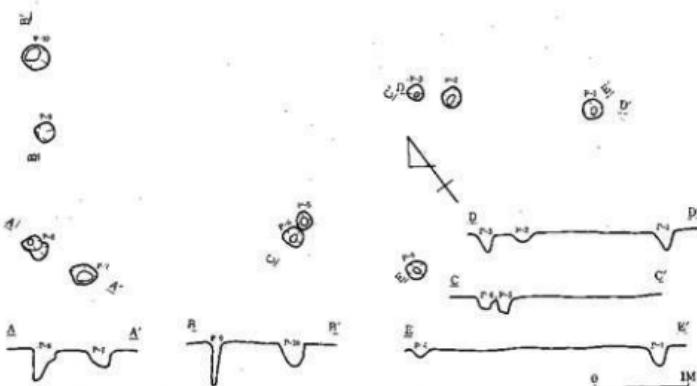
No.	長径	短径	深さ	底径
1	22	20	20	9
2	23	20	9	11
3	17	15	20	6
4	20	19	10	8
5	20	17	17	10
6	22	19	12	10
7	30	22	18	17
8	27	20	35	7
9	22	20	45	6
10	30	26	26	17

(単位はcm)

(平間)



第18図 炉址状遺構

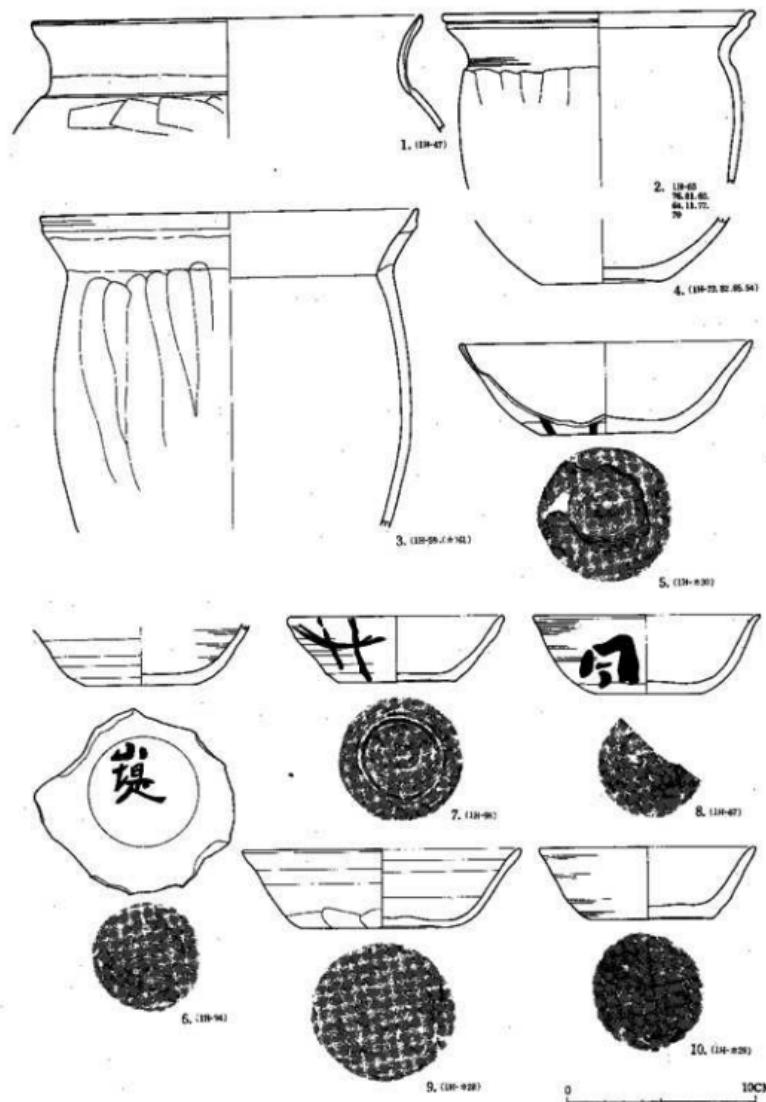


第19図 ピット群

出土遺物

《第1号住居址出土土器》

番号	器形 部	種類	法 量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色 調	備考	Fig. P.L.
1	甕 口縁部	土師	口径-21.0 頸部径-19.8 残存高-6.1 最大直絃23.0	ふくみを持つ胴部は頸部で内反し口縁部は板やかに外反して立ち上がる。	胴部外面は横方向のへラ削り口縁部は内・外面伴模ナデ	細い砂粒を含む	良好	褐色		IH-47
2	甕 口縁～ 頸部	土師	口径-16.6 頸部径-14.0 残存高-9.3	頸部は緩かなるふくらみをもって立ち上り頸部で外反して口縁に至り、口唇部で屈曲して僅かに開いている。	頸部外面は継のへラ削り内面横方向のへラ削り。口縁部は内外面伴ヨコナデ	細い砂粒を多く含む	良好	褐色		IH-70 76 77
3	甕 口縁部 ±	土師	口径-20.3 頸部-17.5 最大直径-19.1 残存高-17.2	胴部は緩やかに内寄して立ち上り、僅かに外反して口縁に至り口唇部で屈曲している。	頸部外面は継のへラ削り。口縁部はヨコナデ、内面は焼成があまく手法の特徴ははっきりしない。	砂粒を多く含む	良好 (低温)	褐色		IH-59 (?) 61
4	甕 底部±	土師	底径-7.0 残存高-35	底部は平底、胴部は外反気味に立ち上るものと思う。	器面外面に2次焼成で付着したと思われる粘土があり手法はわからない。内面は横方向のへラ削り。	砂粒を含む	良	褐色		IH-73 82 85
5	杯 口唇部 ±	土師	口径-15.6 器高-4.9 底径-7.2	底部は平底、体部は緩やかに外反して立ち上りそのまま口唇部に至る。	底部は回転へラ切り、体部内、外面伴輪の擦痕あり内面は黒色を呈している。体部に墨書きあり。	細い砂粒を含む が良質の粘土	良好	外面-淡褐色(口唇部は黒色) 内面-黑色	墨書き	IH- (?) 30
6	杯 口唇部 欠損	土師	底径-6.0 残存高-3.1	底部は平底、体部は緩やかに立ち上り僅かに外反するものと思う。	底部は回転糸切ののち回転へラによる整形を行っている。体部は内、外面とも擦痕あり、底部に墨書きあり。	細い砂粒を含むが良質である	良好	淡褐色	墨書き	IH-94
7	杯 口唇部 ±欠損	土師	口径-11.5 器高-3.5 底径-6.2	底部は平底、体部は緩やかに外反しながら立ち上り口唇部に至る。	底部は回転へラ切り、体部外面は細い繊の擦痕がある。内面器面は低温焼成のためか手法がはっきりしない。体部に筆の先を整えたような墨書きがある。	細い砂粒を含むが胎土は良質である	良	黄褐色	墨書き	IH-96
8	杯 口唇部 ±	土師	口径-12.1 器高-4.2 底径-5.7	底部は平底、体部は緩やかに立ち上り口唇部で僅かに外反して開いている。	底部は回転糸切ののち手持ちへラ削りを行っている。体部は内外面に繊による擦痕がある。体部中央から体下部に墨書きあり。	細い砂粒を含む	良好	淡褐色	墨書き	IH-67
9	杯 口唇部 ±	土師	口径-15.0 器高-4.2 底径-7.5	底部は平底、緩やかに体部は外反して立ち上り口唇部に至る。	底部は静止へラ切り離し、体下部は手持ちへラ削り、内面は軽回転、体部は内、外向伴輪による擦痕	細い砂粒を多く含む	良 (低温)	褐色		IH-

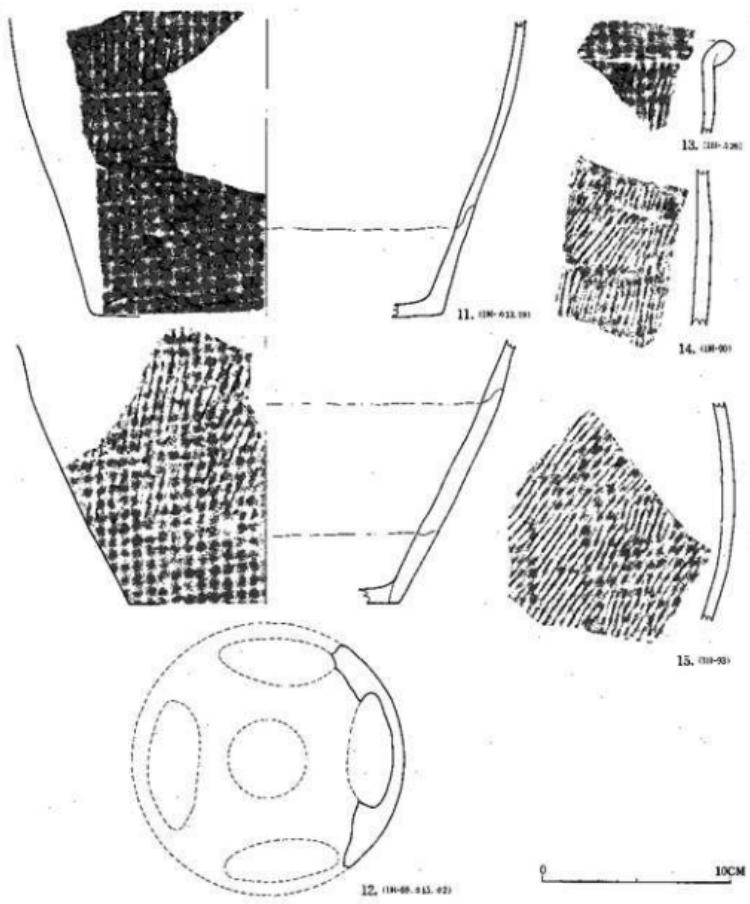


第20図 第1号住居址出土遺物実測拓影図(1)

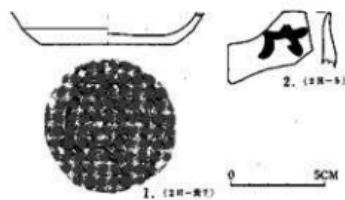
番号	器 形 部	種類	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	粘 土	焼 成	色 調	備考	Fig. P.L.
10	杯 口唇部 十 欠 捻	土師	口径-11.5 器高-3.9 底径-6.5	底部は平底、体部は緩やかに外反しながら立ち上り口唇部に至る。	体部外面に縦による擦痕があり、又内面にヨコナデが観察されるが底部内、外面は低温焼成のため手法はわからない。	細い砂粒を含む	良 (低溫)	黄褐色	1H- (n)29	
11		土師 質 須恵	底径-18.7 残存高-15.8 最大底径-27.6	底部は平底、胴部は底部よりはは屈筋気味に立ち上り、僅かに外反して開くものと思われる。	底部はヘラによる整形、胴下部外面は横のヘラ削り。胴中央よりタタキ目がある。内面ヘラによる整形。	細い砂粒を多く含むが白い粘土質も含まれている	良好	黄褐色	1H- (n)13 (n)17 (n)19	
12	瓶 胴下部 ～底部	土師 質 須恵	底径-14.6 残存高-13.8 最大底径-26.6	底部は平底、胴部は底部より屈筋気味に立ち上り、僅かに外反して開くものと思われる。	底部は焼成前につくられた横円形の孔を対にもち十文字の中央に円孔を有すと思われる。胴部外面下部は横のヘラ削り胴中央はタタキ目、内面はヨコナデ最後に底部孔をヘラにより整形している。	細い砂粒を含む	良好	暗褐色	1H-15 69	
13	口縁一 片	土師 質 須恵		胴部は僅かな外反をもって立ち上るものと思われる。	口縁部は折り返しておおり胴部はタタキ目がある。	砂粒を多く含む	良好	暗褐色	1H-26	
14	胴部一 片	須恵				細い砂粒を多く含む	良	灰 色	1H-90	
15	胴部一 片	須恵			タタキ目があり灰釉	細い砂粒を含む	良好	灰 色	1H-93	

《2号住居址出土土器》

番号	器 形 部	種類	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	粘 土	焼 成	色 調	備考	Fig. P.L.
1	- 杯 底 部	土師	底径-7.2 残存高-1.7	底部は平底、体部は緩やかに外反して立ち上るものと思う。	底部は回転糸切ののち回転ヘラ整形。外面下部は回転ヘラ削り、内面横のナデが見えるが斑点状の剥離があつてはっきりしない。器内外面に斑点状の剥離があるが低温焼成の為であろうか。	細い砂粒を含むが粘土は良質	良	淡褐色		2H- 表 7
2	杯 口唇部 一片	土師			体部内外に横回転による擦痕体部はは中央に墨書きがある。	細い砂粒を含む	良好	淡褐色 墨書き		2H-5



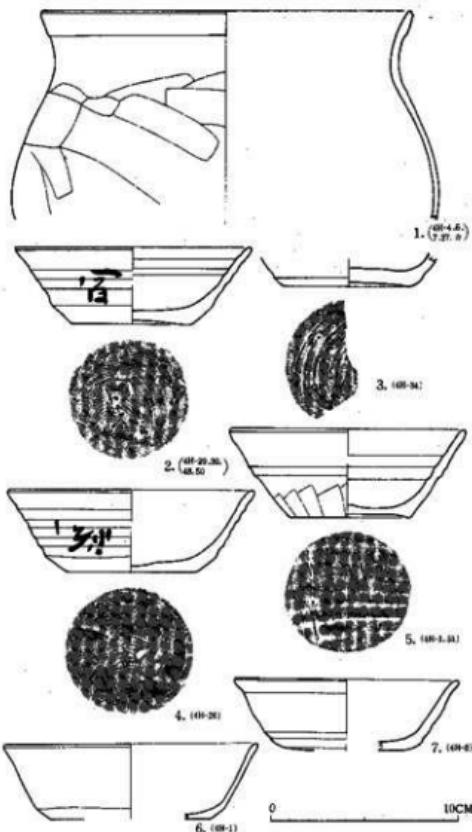
第21図 第1号住居址出土遺物実測拓影図(2)



第22図 第2号住居址出土遺物実測拓影図

《第4号住居址出土土器》

番号	器形 部	種類	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	Fig. P.L
1	甕 口縁唇	土器	口径-19.8	胴部は内側して立ち上り口縁は外反して僅かに開いている。	胴部外面は横もしくは斜方向のヘラ削り、内面は横のヘラ削り、口縁部は内、外面伴縫による擦痕がある。口縁部にナデによる僅かな棱がある。	細い砂粒を多く含む	良好	褐色	4H-4 7 27	
2	杯 口辺部 土	土器	口径-12.6 器高-4.1 底径-6.3	底部は平底、体下部より外反しながら立ち上りは口唇部に至る。	底部は回転糸切のうち回転ヘラ削りを体下部より行っている。体部内、外面伴縫による擦痕がある。外面体部中央に墨書きがある。	細い砂粒を多く含む	良好	褐色	墨書き 4H-30 48 50	
3	杯 底部土	土器	底径-6.7 残存高-1.5	底部は平底、体部は緩やかに外反して立ち上るものと思われる。	底部は回転ヘラ切り、のちヘラによる整形。	砂粒を含む	良好	褐色	4H-34	
4	杯 口辺部 土	土器	口径-13.1 器高-4.4 底径-6.9	底部は平底、体部は緩やかに外反して立ち上りそのまま口唇部に至る。	底部は回転糸切りのうち回転ヘラ整形、体部は内、外伴縫による擦痕があり、外面体下部に回転ヘラ削りがある。外体部に墨書きがある。	細い砂粒を含むが胎土は良質	良好	褐色	墨書き 4H-26	
5	杯 口唇部 土	須恵	口径-12.5 器高-4.7 底径-6.4	底部は平底、体部は外反して立ち上り口唇部に至る。	底部はヘラによる切り離し、体部は内、外面伴縫による擦痕があり、のち体下部を持ちのヘラ削りにより整形している。	細い砂粒を含む	良 (低温)	灰色	4H-1 51	
6	杯 口辺部 土	須恵	口径-13.5 器高-4.0 底径-8.5	底部は平底、体部は僅かに外反して立ち上り口唇部に至る。	底部は回転ヘラ切り、体部は内外伴低温焼成のためはっきりとした手法が観察できない。	砂粒を多く含む	不良 (低温)	灰色	4H-1	
7	杯 土	土器	口径-12.0 器高-3.7 底径-6.5	底部はやや丸味を呈す。体部は僅かに外反しながら立ち上り口唇部で開いている。	体部内外伴ヨコナデ	細い砂粒を含むが胎土は良質である	良	淡褐色	4H-8	

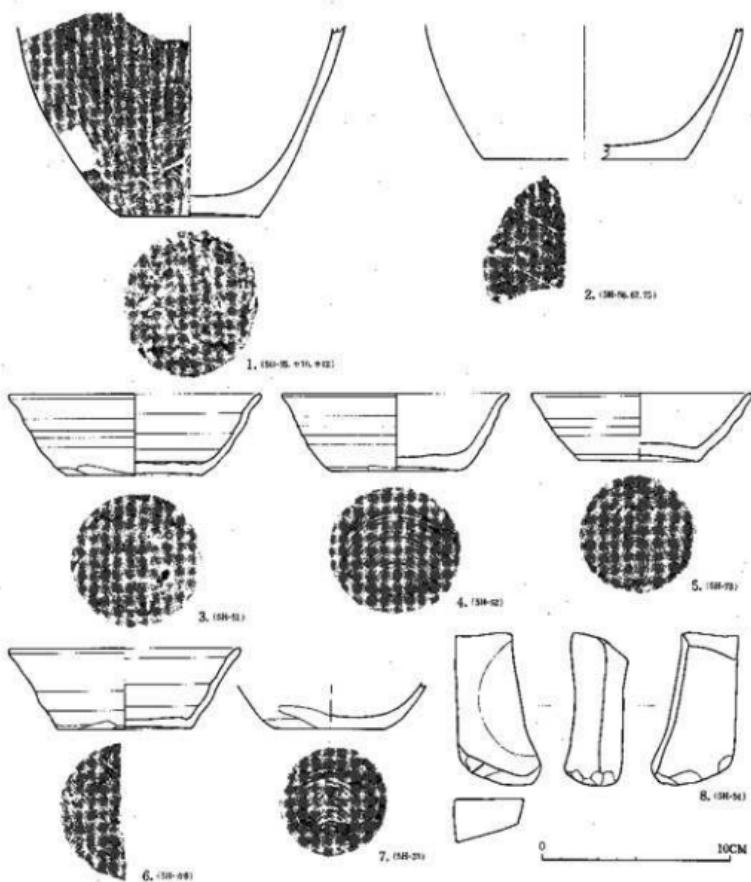


第23図 第4号住居址出土遺物実測拓影図

〈5号住居址出土土器〉

番号	器 器 形 態	種類	法 量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色 調	備考	Fig P., L.
1	甕 胴部～ 底部	土器	底径-7.5 残存高-12.0 最大直径 -17.4	底部は平底、胴部は胴下部より緩やかに外反しながらほぼ直線的に立ち上るものと思われる。	底面は本業模がありその上をヘラ削りにより整形している。胴部外面は細い縦のヘラ削り、内面は横方向のヘラ削り。胴面内外に2次焼成による剥離があり又外面には灰、すすの付着が観察される。	砂粒を 多く含む	良 2次 焼成 を受 けてい る	褐色 一部暗 褐色の 部分が ある	5H-55 (+)10 (+)12	

番号	器 形 部	種類	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考	Fig. P.L
2	甌 底部 $\frac{1}{2}$	土器	底径-10.9 残存高-7.1 最大直径 -17.0	底部は平底、側部は刷下部より緩やかに内脣して立ち上るものと思われる。	底部は木葉痕がある。器内外に2次焼成を受けて付着したと思われるす、灰がある。	砂粒を多く含む	良 高熱 を受けて いる	灰褐色	SH-56 67 75	
3	杯 口唇部 十 欠 捜	土器	口径-13.5 器高-4.3 底径-7.3	底部は平底、体部は緩やかに外反して立ち上り口唇部に至る。	底部は手持ちヘラ削りにより整形を行っている。体部は内、外面伴輪による擦痕あり、外側下部は手持ちヘラ削りを行っている。器内外とも何かの油を施したのか黒色を呈している。	砂粒を多く含む	良 好	黑 色	SH-51	
4	杯 口唇部 十	土器	口径-12.1 器高-4.1 底径-7.0	底部は平底、体部は緩やかに外反して立ち上り口唇部に至る。	底部は回転糸切ののちヘラ削り体部内外伴輪による擦痕がある。	細い砂粒 を含むが 胎土は良質である	良 (低溫)	淡褐色	SH-52	
5	杯 完形品	土器	口径-11.8 器高-3.6 底径-6.3	底部は平底、体部は外反しながら立ち上り口唇部に至る。	底部は回転糸切ののちヘラにより底辺部を整形している。体部内外面に回転によるナデ。	砂粒を含む	良 好	褐 色	SH-73	
6	杯 口沿部 十	土器	口径-12.3 器高-4.3 底径-7.1	底部は平底、体部は緩やかに外反して立ち上り、口唇部に至る。	底部はヘラ切り離し、体下部は手持ちのヘラ削り、体部内外に醜による擦痕がある。	細い砂 粒を多 く含む	良 褐 色		SH- (か)8	
7	杯 底 部	土器	底径-5.9 残存高-2.3	底部は平底、体部は緩やかに外反して立ち上るものと思われる。	底部は回転糸切ののち手持ちヘラ削り、体下部は回転ヘラ削り体部内外面は醜による擦痕。	細い砂粒 を含むが 胎土は良質である	良 好	淡褐色	SH-33	



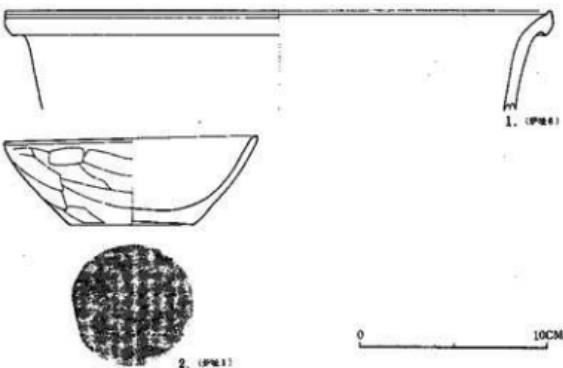
第24圖 第5號住居址出土遺物火燒拓影圖

〈炉址状造構〉

番号	器 形 部	種類	法 量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色 調	備考	Fig. P.L
1	瓶 口縁部	土器 質頗 良	口径-29.1 残存高-5.3			砂粒を 含む	良好	外面灰 褐色 内 面 色		円-6
2	杯 身	土器	口径-13.5 高径-4.6 底径-6.7	底部は平底、体部は外 反しながら立ち上りそ のまま口唇部に至る。	底部はヘラ削り、体部 外面は斜方向のヘラ削 り、内面はヘラミガキ。	砂粒を 含む	良	褐 色		焼土 -1

〈グリッド〉

番号	器 形 部	種類	法 量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色 調	備考	Fig. P.L
16	杯 身	土器	口径-12.2 器高-4.0 底径-7.0	底部は平底、体部は僅 かに内脣しながら立ち 上り口唇部で僅かに開 いている。	底部は回転糸切ののち 回転ヘラ整形、体部は 内、外面伴輪による擦 痕がある。	細い砂 粒を多 く含む	良	黄褐色		
17	杯 底 部	土器	底径-6.0 残存高-2.0	底部は平底、体部は僅 かに外反して立ち上る ものと思う。	底部は回転糸切ののち ヘラ削り墨書きあり。	細い砂 粒を多 く含む	良好	黄褐色	墨書き	-82
18	杯 口辺部 一 片	土器				精 良	良好	淡褐色	墨書き	14-N表



第25図 炉址状造構出土遺物実測拓影図

グリッド内出土遺物

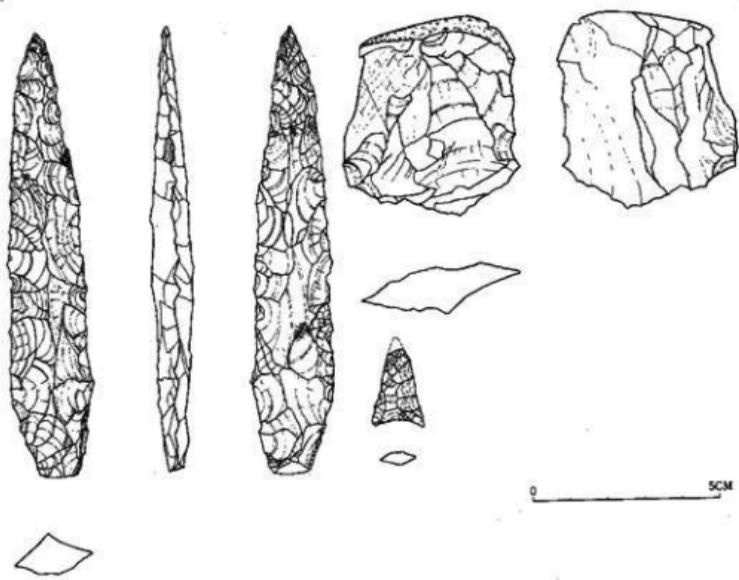
石 器 (第25図1～3 図版32図)

1., 無形の小形石鐵。先端部が欠損している。チャート製（長さ約1.9cm）2., チャート製の剝片で自然面を打面としている。使用痕は認められない。（長さ4.5cm, 幅4.1cm）3., 長さ11.6cm, 幅約2cmの細長い槍先形尖頭器である。階段状剥離によって作られ、断面が凸形を呈する。

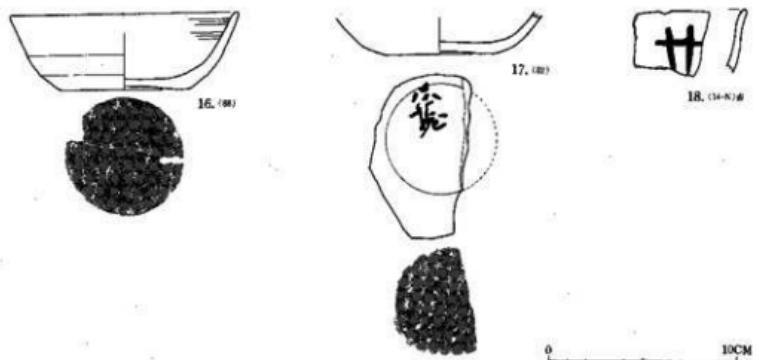
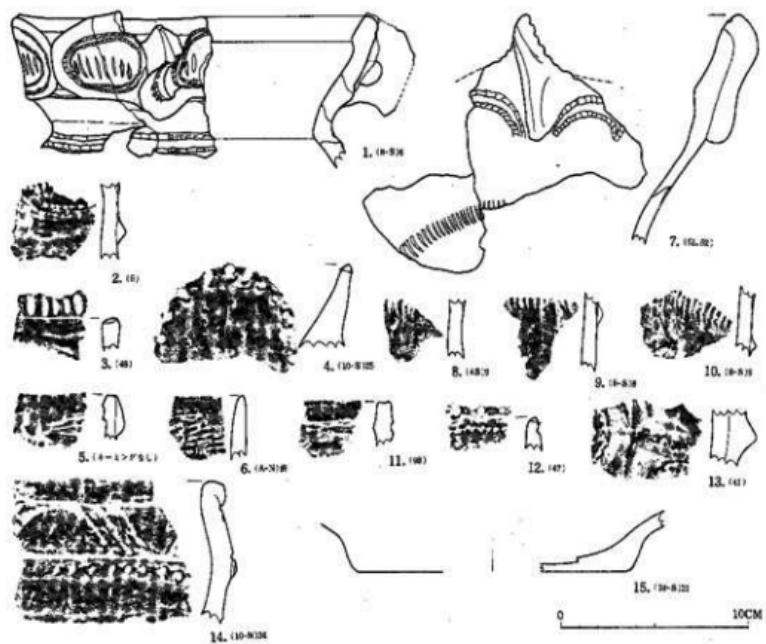
縄文式土器 (第26図1～15図版30, 31図)

本遺跡出土の縄文土器は、阿玉台式期を主体としている。

1., は胴の張った深鉢。隆起線に付随して複列の角押文が施され、楕円形に区画された中央には列の爪形文が配されている。把手にも複列の角押文が施されている。雲母混入、焼成良好。2., は複列の角押文が施されている。1.に類するものか、雲母混入。3., は口縁部であり、棒状工具を連続的に押捺してある。雲母混入、焼成良好。4., は扇形に近い把手。口縁部に棒状工具により連続的に押捺が施されている。雲母混入、焼成良好。5., は口縁部片、内側が欠損している。隆起線により文様区画されているが、区画は明らかでない。雲母混入、焼成良好。7., は未発達のキャリバー形の深鉢。隆起帯により把手を作り出し、口唇部に棒状工具によって押捺を施している。把手を文様の軸とし両側に複列の角押文によって連弧状文が描かれている。口頭部には爪形文が配される。雲母が混入、焼成良好。8., 9., 10., は爪形文及び隆起線が特徴的である。雲母混入、焼成良好である。11., は口縁の外反する深鉢か。口唇部に沈線がめぐる。口縁部には2本の沈線が施されている。焼成は不良。12., は口唇部に棒状工具によって押捺が連続される。一列の角押文も描かれている。焼成良好。把手であろうか。4.に類似する。13., は隆起線と付属する複列の角押文が特徴である。口縁部の下部であろうか。雲母が混入する。焼成良好。14., は未発達のキャリバー形の深鉢。口縁部の上部と棒状工具による押捺の施された隆起線の内側に角押文を配し、その間を文様帶とし、3本の角押文で連弧文が描かれている。雲母が混入、焼成良好。15., は径14.4cmの底部。焼成良好、雲母混入。一点であるが、6., は撚糸か。纖維が混入している。時期不詳。



第26図 グリッド内出土遺物実測図(石器)



第27図 グリッド内出土物実測拓影図

第五章 小 結

調査に先だって、対象地域内の全体にわたり表面採集を実施し、その時点においてはかなりの遺物が採集されており、多くの遺構の検出が予想されていた。しかしその結果・前述したように土師器・須恵器を併する住居址6軒、掘立柱建物址1軒、時期不明の土塙17基、ピット、溝、炉址状の特殊遺構が検出されたにとどまった。ここに池ノ台遺跡の若干のまとめと考察を述べてみたい。

縄文時代

この時期に該当する遺構は、第1, 2, 5, 8号土塙の計4基である。いずれも遺物は出土していないが、形態、構築、覆土などの共通点から見て、同時と考えてさしつかえないだろう。これらの土塙の分布は台地中央より東側に位置し、形態は長楕円形プランを呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がり、中程で外開きする。土塙底は起伏が少なく平坦である。覆土はおおむね自然堆積を示し、人為的な堆積といえる土塙ではない。このような特徴をもつ土塙は近年、調査・報告例は増加の傾向があるが、その性格は明確に規定されていない。一般的に縄文時代に見られる土塙の用途として、貯蔵穴、墓塚、おとし穴などが考えられる。本遺跡で検出された土塙にあてはめて検討してみると貯蔵穴として用いられる場合には、住居址などの居住施設等の遺構が検出されているが、本遺跡では検出されていない。墓塚を想定した場合は、人為的な堆積を示すものが前提条件となるが、本遺跡の土塙はいずれも自然の營力による侵入である。本遺跡の土塙は、伴出遺物がなく、覆土が自然堆積を示していることは、その用途がおとし穴を意図して構築されたものと考えられる。遺物はいずれも表土層内より出土した。石器は3点出土し、利器と考えられるものは、石鏃及び槍先形尖頭器である。先土器時代の尖頭器は一般的に柳葉形であることから、本遺跡出土の尖頭器は縄文時代に属するものと考えられる。この種の尖頭器は從来あまり注目されていなかったが、今後、十分注意する必要があろう。

土器は、中期阿玉台式土器である。本遺跡の出土土器を文様別に分類すると、一列の角押文(14)、複列の角押文(21, 2, 7)、爪形文(1, 7, 8, 9, 10)、棒状工具による押捺(3, 4, 12, 14)となる。さらに、文様に出土の特徴としては、隆起線に付随して角押文がないことである。これららの特徴から判断すると、本遺跡出土の阿玉台式土器は、第2群、第2類〈西村正衛「阿玉台式土器編的研究の概要—利根川下流域を中心として—」(学術研究18)〉向油田貝塚の第1群第2類〈西村正衛「千葉県香取郡向油田貝塚出土の土器」(学術研究21)〉と同時期のものであり、阿玉台期の中頃のものである。この時期を知る一資料となろう。

歴史時代

この時期に該当する遺構は、住居址6軒、掘立柱建物址1軒、炉址状遺構が検出された。住居址は、第2号住居址(カマド、柱穴等の付帯設備がなく、床面の状況などから住居とし

ての機能があったが、疑問視されるところである。)を除き、その形態はいずれも方形を呈し、規模は一辺が4m以下の比較的小型に属するものである。

柱穴は、有柱(5号址)と無柱(1, 3, 4号址)があり、無柱の住居址が多く、掘り方を残さないで何らかの上屋構造に変革したことが考えられる。また、第5号住居址は火災による焼失住居で遺存はきわめて良好な状況を示し、今後住居の上屋構造の解明の上できわめて重要な資料と考えられる。

カマドは、北壁中央部と西壁中央部に位置するものが見られ、第5号住居址を除き、いずれも天井部は落下しているものの全体の遺存は良好である。袖は、芯に粘土、山砂を混合土として作られており特に5号住居址では、袖より天井部にかけて粘土、山砂に植物纖維を多く加えて混合土とし、天井を補強に利用して、落下を防止できるように工夫している点に注目される。

掘立柱建物址は、出土遺物が無く、所産時期が不明であり、住居址と少なくともその配置には何ら両者を結びつける要素はないが、集落として想定した場合においては、何らかの関連を有するものと思われる。

炉址とともに周囲より、半円形からなるピット群と関連を持つものとして、ここでは、「炉址状遺構」という仮名称を用いた。住居址周辺より検出される屋外的な炉址は、性格が異なるものと考えられる。

出土遺物は、住居址、炉址より、土師器(甕、壺)須恵器(壺)土師質、須恵器(眞口)等が出土し、甕、眞口、壺等によって、構成される。甕形土器は、口縁部が「く」字状に、屈曲と直線的に立ち上るものと、口唇部が突出するものがある。壺形土器は、底部に回転ヘラ削痕を残すもの静止糸切り後に底部全体と底部周縁にかけて、ヘラによる再調整が施されているもののがみられる。壺形土器の中より墨書き土器が多く確認された。しかし、墨痕が希薄であったり磨滅をしていたりで、ほとんどのものが判読困難である。

以上、検出した住居址、炉址等の遺構は、その出土遺物の特徴からその時期は平安時代後半に属するものと思われる。

今回検出した遺構は、この台地全体に広がる集落の一部と考えられ、現在同一台地で、区画整理に伴う埋蔵文化財発掘調査が千葉県文化財センターによって実施されており、今後調査が進み研究が加えられる過程において、全容が解明されると思われる。

(平岡)

池ノ台遺跡 —————

八千代市都市計画街路3・4・1号線建設工事に伴う発掘調査報告書

印 刷 昭和55年3月1日

発 行 昭和55年3月31日

発行者 八千代市遺跡調査会

編集者 八千代市遺跡調査会

編集責任 山武考古学研究所

印刷・製本 梶松戸印刷所

写 真 図 版

図版 1

遺跡航空写真



図版 2

遺構写真



第 1 号住居址

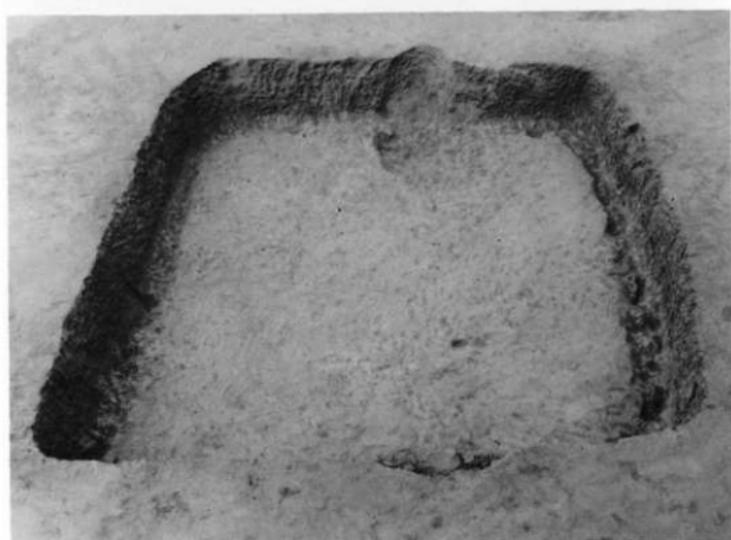
1. 確認状況
2. 遺物出土状況

図版 3

造構写真



第1号住居址 1. 調査状況
2. カマド調査状況



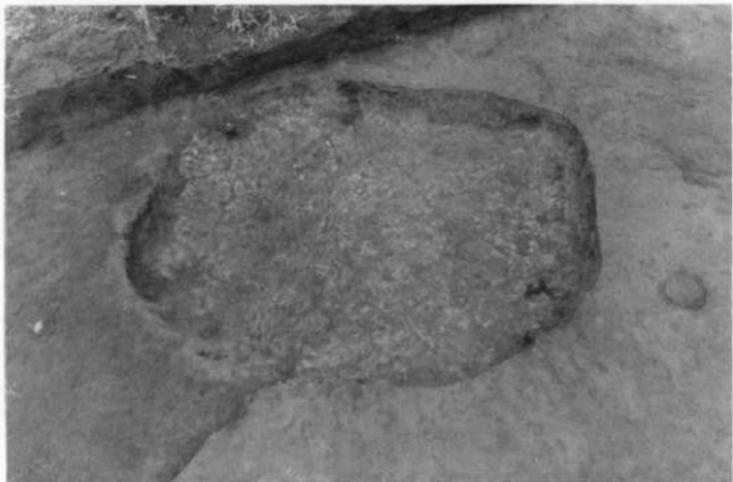
第1号住居址

1. カマト調査終了状況

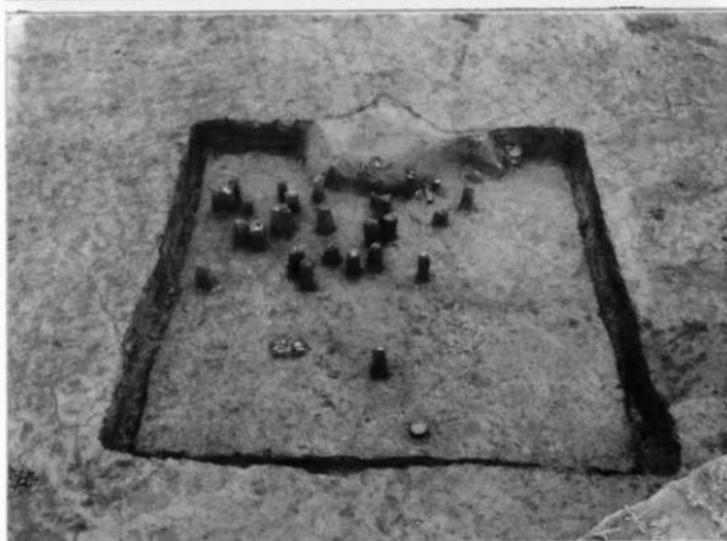
2. 調査終了状況

図版 5

遺構写真

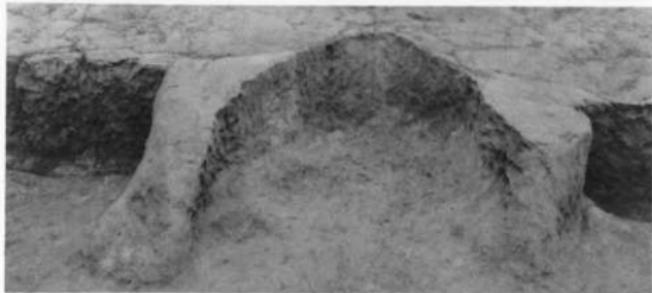
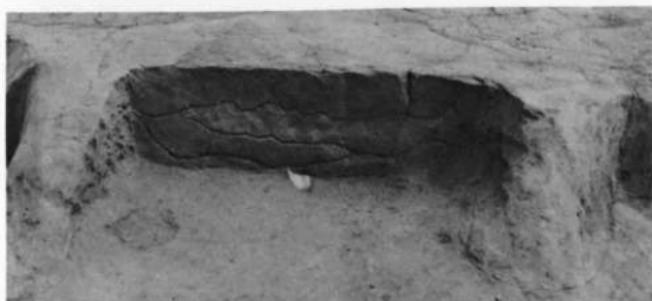


上 第2号遺構調査終了状況 下 第3号住居址調査状況



上、第2号遺構・第3号住居址調査終了状況 下、第4号住居址遺物出土状況

造構写真

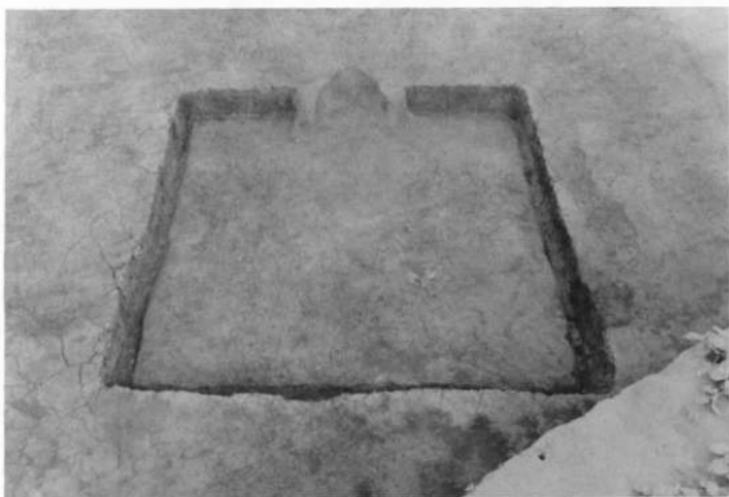


第4号住居址

1. 調査状況
2. カマド調査状況
3. カマド調査終了状況

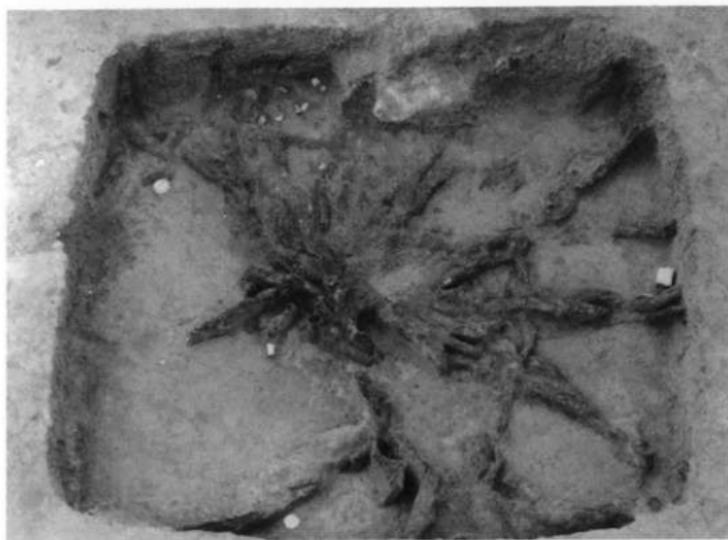
図版 8

遺構写真



第4号住居址

1. 調査状況
2. 調査終了状況



第 5 号住居址 炭化物出土状況



第5号住居址

1. 調査状況

2. カマド調査状況

図版 11

遺構写真



第5号住居址カマド調査状況

遺構写真



掘立柱状遺構調査状況



溝状遺構確認状況

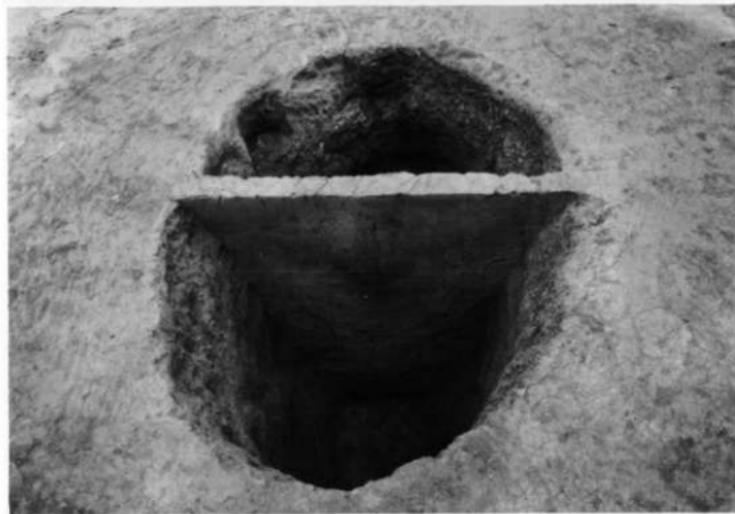


溝状遺構調査終了状況

遺構写真

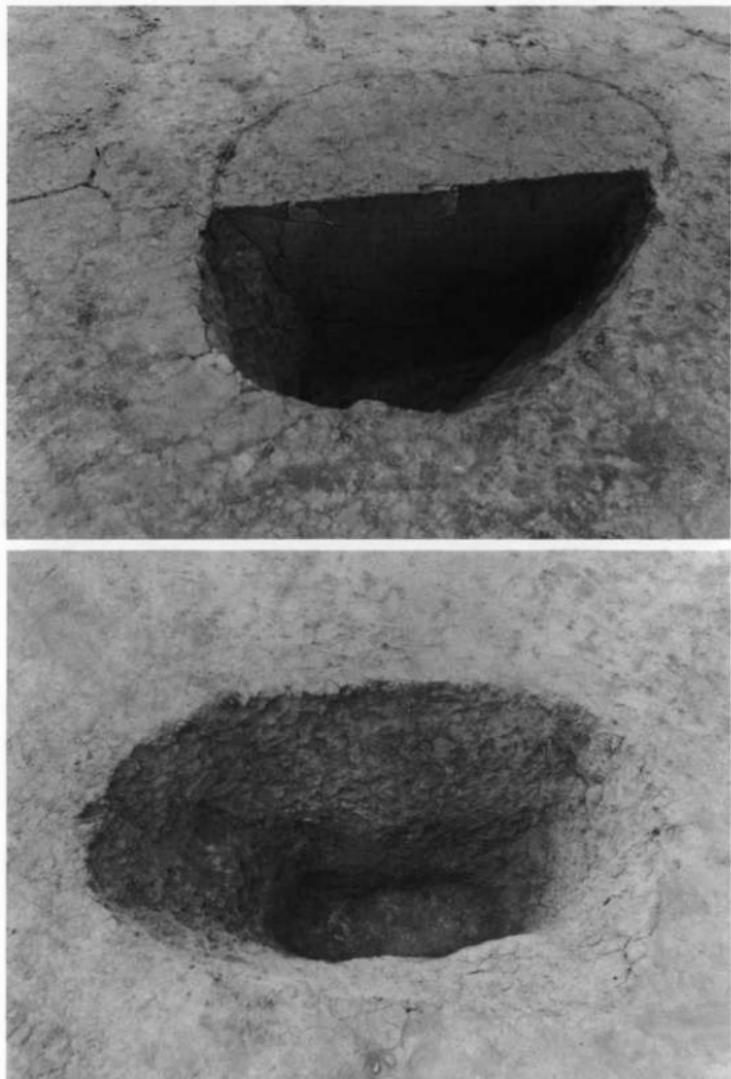


屋外炉址状遺構調査状況



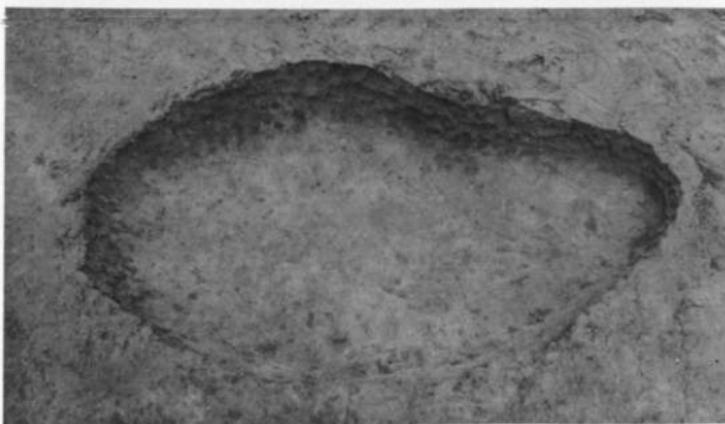
第1号土塙
1. 土層堆積状況
2. 調査終了状況

遺構写真



第2号土塙

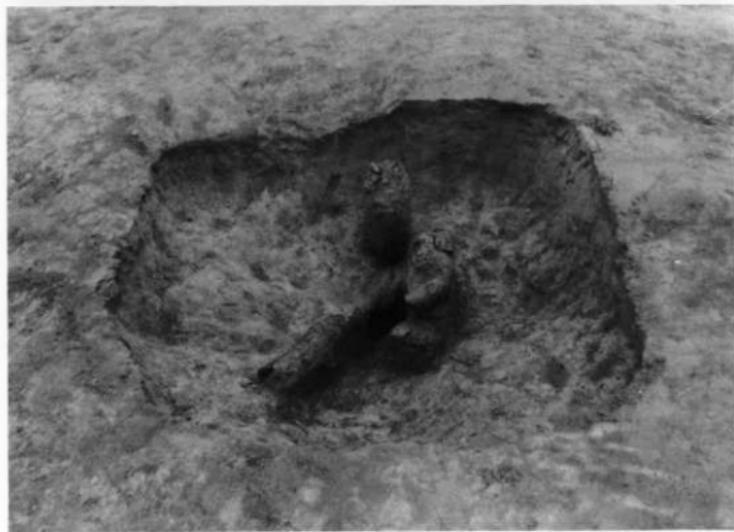
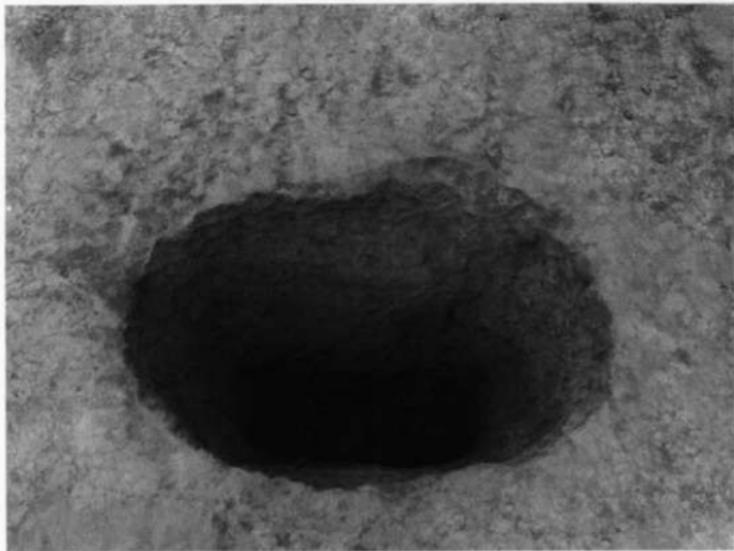
1. 調査状況
2. 調査終了状況



第4号土塁
1. 調査状況
2. 調査終了状況

第5号土塁

遺構写真



上、第9号土塙調査状況 下、第10号土塙調査状況

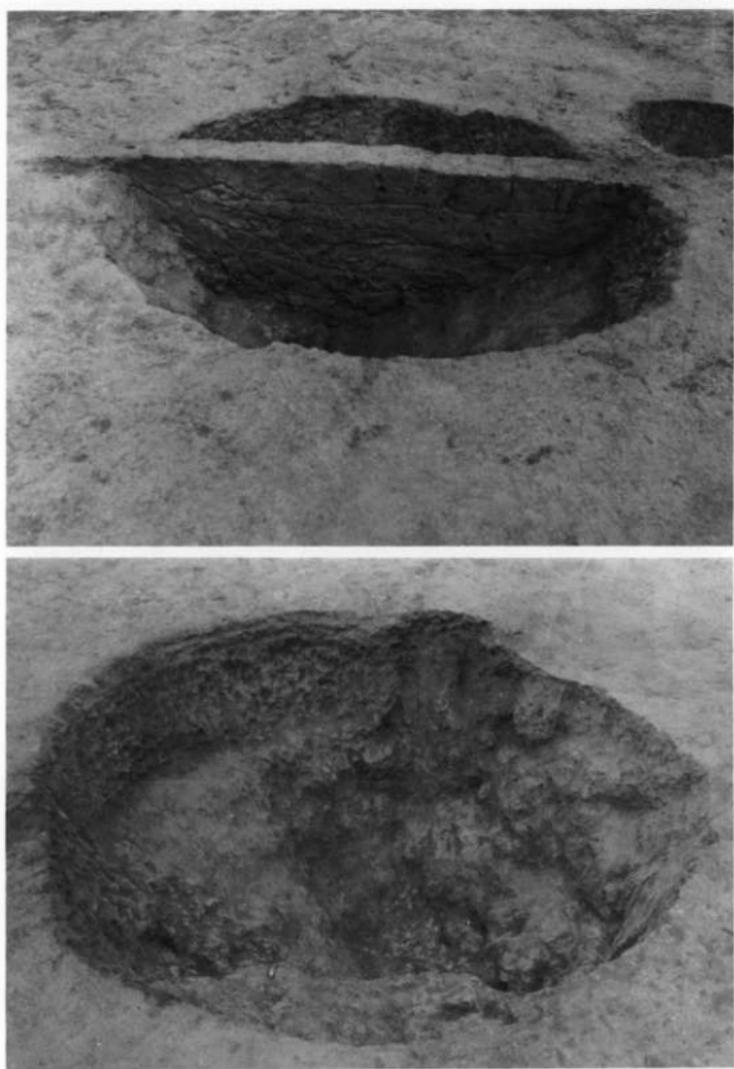
遺構写真



第11号土塙

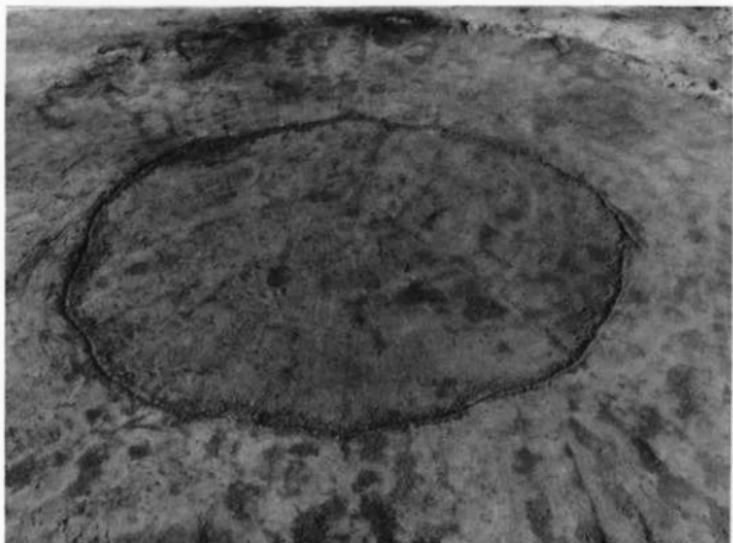
図版 19

造構写真

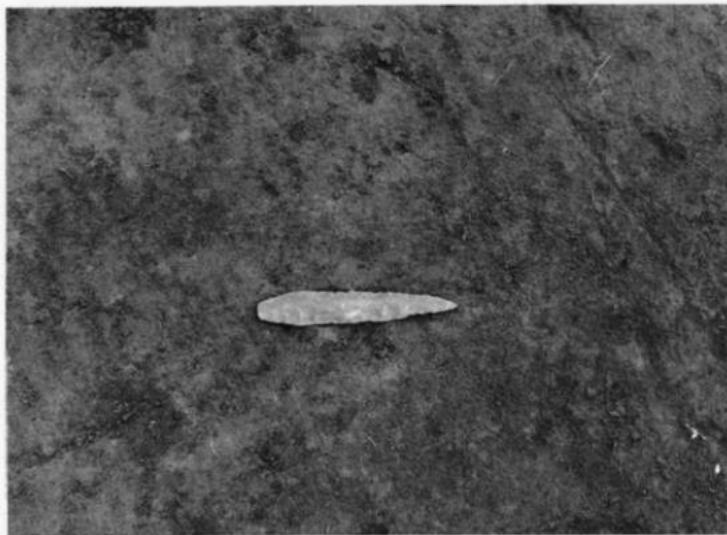


第15号土塙（倒木址）

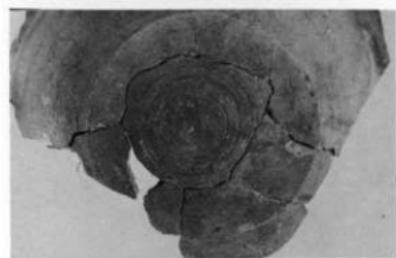
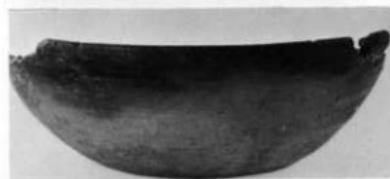
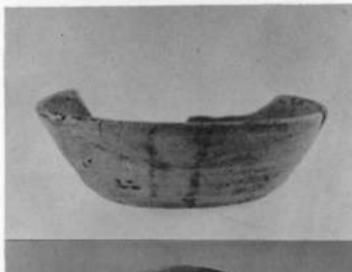
造構写真



第16号土塙



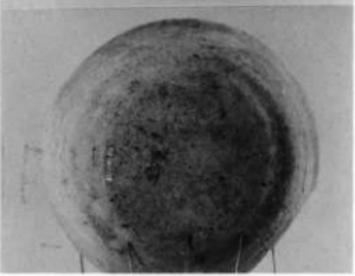
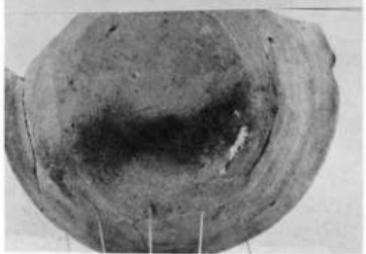
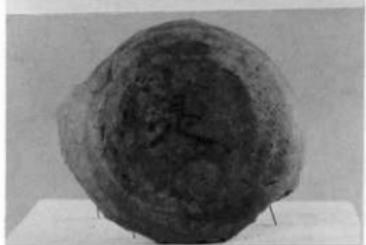
遺跡內石器出土狀況



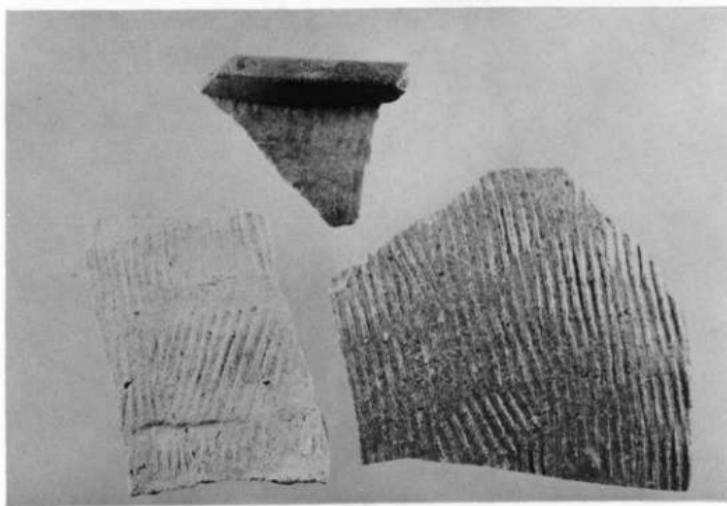
第1号住居址出土遺物

図版 23

遺物写真



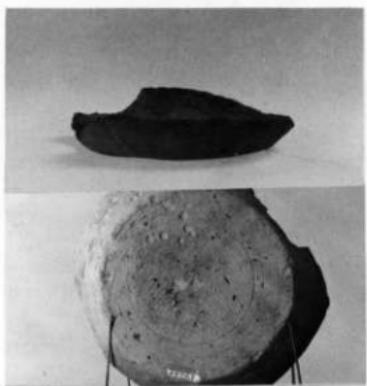
第 1 号住居址出土遺物



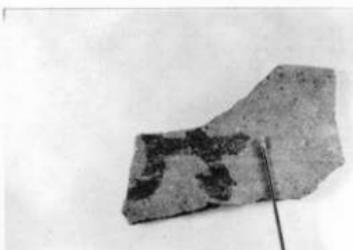
第1号住居址出土遺物

図版 25

遺物写真



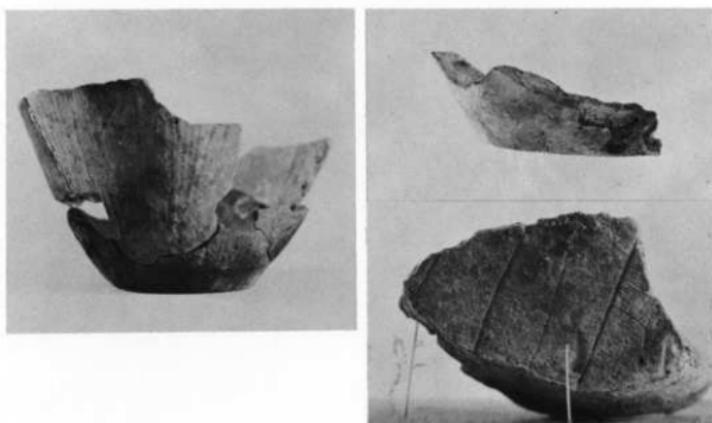
第2号遺構出土遺物



第4号住居址出土遺物

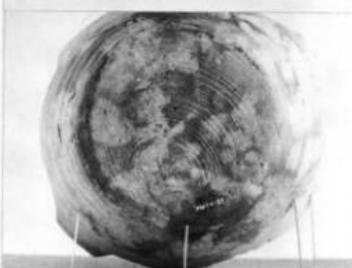
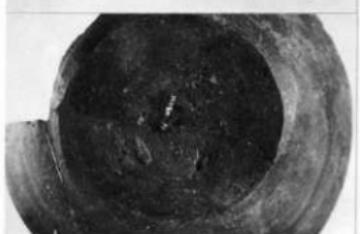


第4号住居址出土遺物



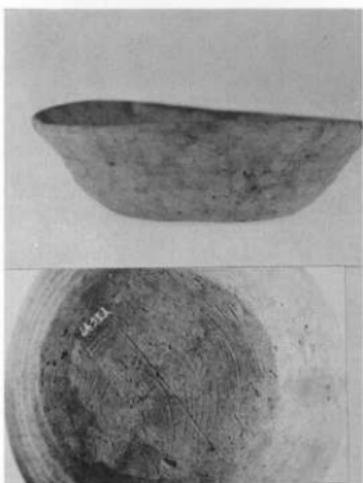
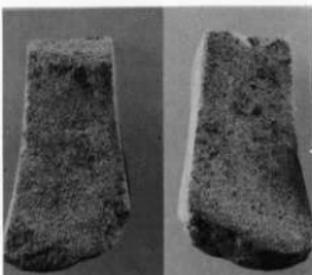
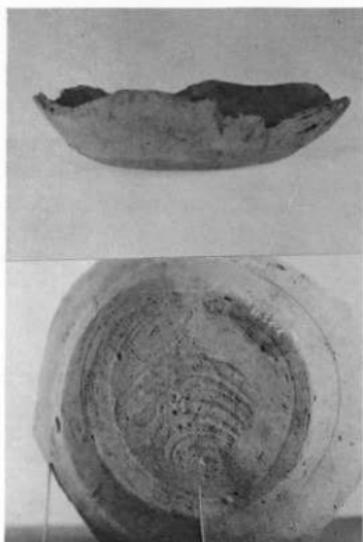
第5号住居址出土遺物

遺物写真



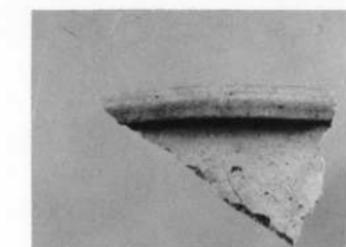
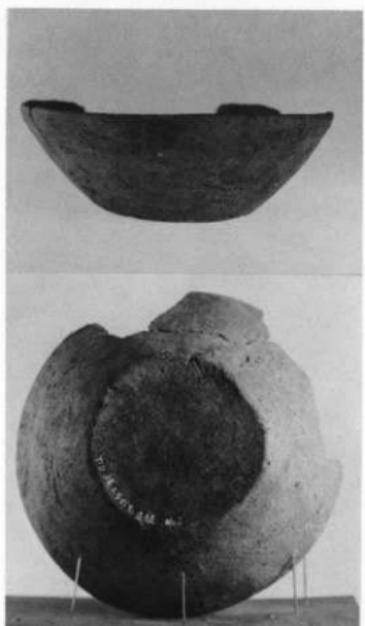
第5号住居址出土遺物

遺物写真



第5号住居址出土遺物

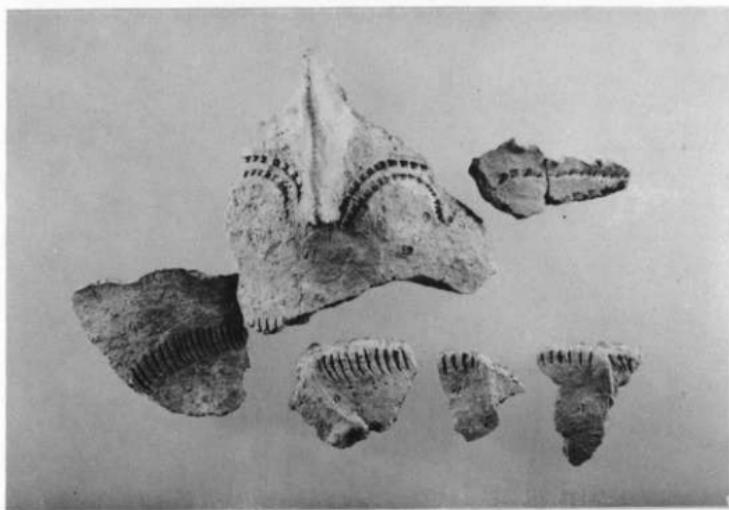
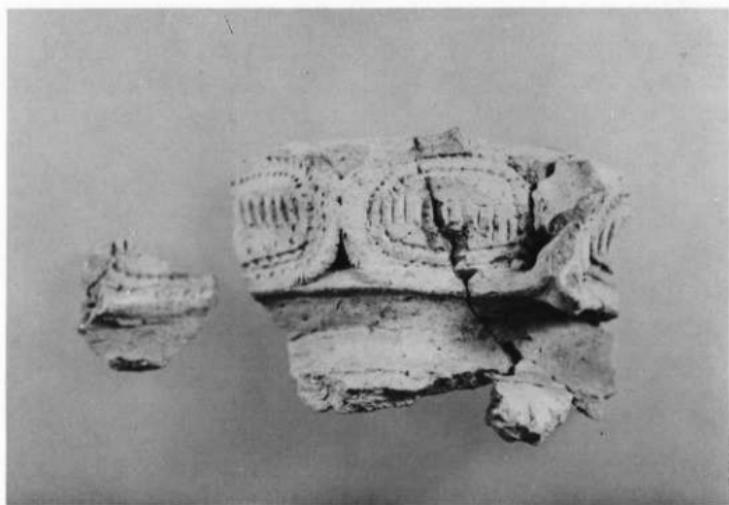
遺物写真



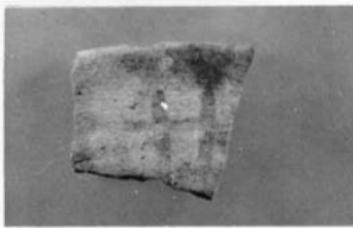
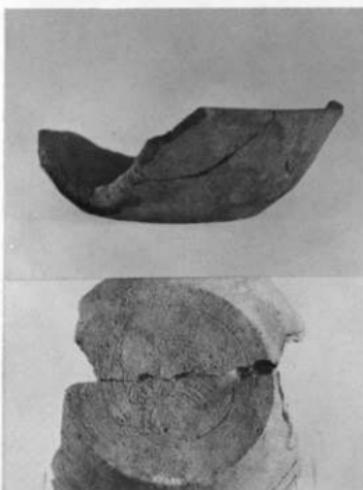
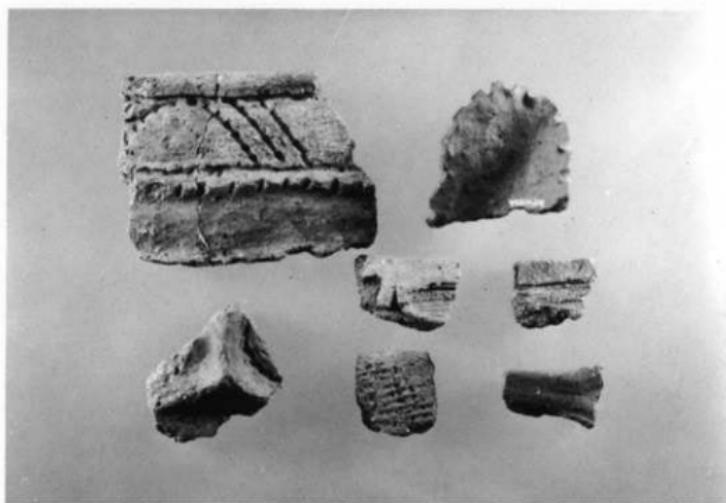
炉址状造構出土遺物



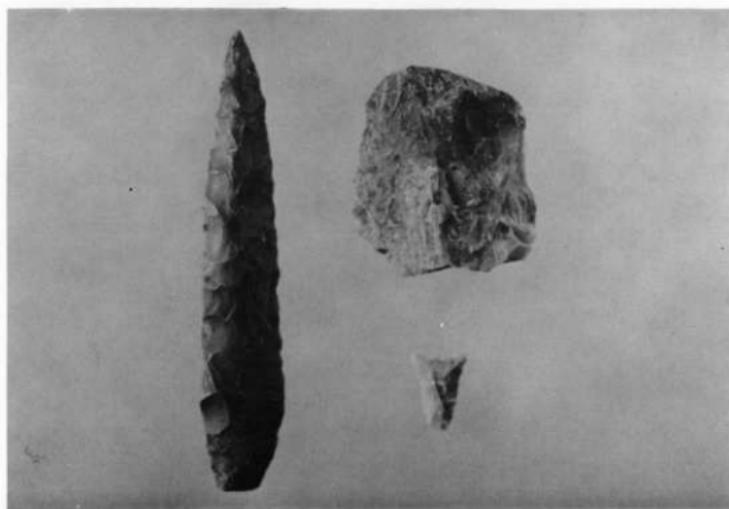
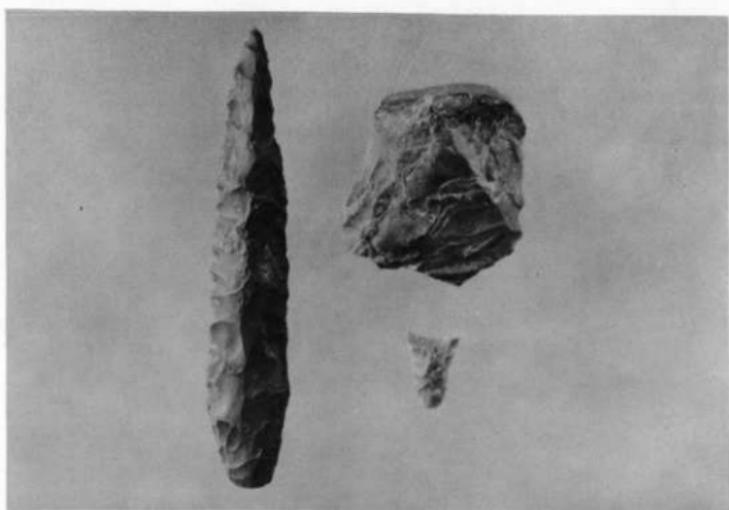
第16号土塚出土



遺跡内出土縄文式土器



上、遺跡内出土柵文式土器
下、遺跡内出土土師式土器



遺跡内出土石器、上 表・下 裏

池ノ台遺跡

八千代市都市計画街路3・4・1号線建設工事に伴う発掘調査報告書

印 刷 昭和55年3月1日

発 行 昭和55年3月31日

発行者 八千代市遺跡調査会

編集者 八千代市遺跡調査会

編集責任 山武考古学研究所

印刷・製本 勝松戸印刷所